

第 51 回大会報告

期日：2009 年（平成 21 年）10 月 10 日（土）～11 日（日）

会場：同志社大学 今出川キャンパス

担当：第 51 回大会実行委員会

委員長：富田 健次

委員：越後屋 朗、コヘン・アダ・タガー、手島勲矢、中田 考、中村信博、高尾賢一郎

第 1 日 10 月 10 日（土）

14：00～ 公開講演会

17：00～ 奨励賞授与式

18：00～ 懇親会

第 2 日 10 月 11 日（日）

10：00～ 研究発表

参加者 213 名

プログラム

第 1 日 公開講演会 同志社大学 寒梅館 地下 1 階・ハーディーホール

イスラーム政体『カリフ制』をめぐって

14：00～ 同志社大学神学部・大学院神学研究科 教授 中田 考

「イスラームの今日的使命—カリフ制再興による大地の解放」

15：30～ 一橋大学社会学部・大学院社会学研究科 教授 内藤正典

「トルコ共和国における世俗主義とイスラーム主義の相克

—カリフなきムスリム社会の矛盾と展望」

第 2 日 研究発表 5 部会

同志社大学 今出川キャンパス至誠館

研究発表者・題目

第 1 会場

1. 西秋 良宏 西アジア新石器時代の井戸
2. 小野塚拓造 古代パレスティナのオリーブ油生産—前 2 千年紀後半の円形搾油施設をめぐって
3. 門脇 誠二 後期新石器時代の南レヴァント地方における鎌刃のデザインと製作技術
4. 佐藤 育子 フェニキアの海外発展と宗教の伝播
5. 西山 伸一 トルコ南東部、オロンテス河下流域の考古学調査—1999 年から 2008 年の成果
6. 杉本 智俊 鉄器時代のイスラエルにおける「命の木」の表象の意義
7. 長谷川修一 天理参考館所蔵テル・ゼロール出土のアンフォラ印章
8. 岡田 真弓 イスラエルにおける歴史展示の変遷とその背景—国立公園を事例として

第 2 会場

1. 三津間康幸 『(バビロン天文) 日誌』における *Bābilāya, mār Bābili*
2. 前田 徹 ウルク期の王権

3. 春田 晴郎 アルシャク朝パルティアのイラン暦法考
4. 土谷 遥子 ダレル溪谷ブグッチ遺跡に関する伝承—パキスタン北部地方『法顕傳』現地調査 2008
5. 矢澤 健 エジプト・ダハシュール北遺跡 2008 年調査報告
6. 小高 敬寛 ケルク土器をめぐる諸問題
7. 渡辺千香子 メソポタミアの粘土板（文書）と古環境

第3会場

1. 馬場 匡浩 エジプト・ヒエラコンポリス遺跡の加熱・焼成施設の発掘調査
2. 近藤 二郎 ルクソール西岸ウセルハト墓（TT47）の調査
3. 和田浩一郎 マディーナト・グラープ 20/21 号墓の再検討
4. 河合 望・吉村 作治 エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡頂部で発見された新王国時代のトゥーム・チャペルとイシスネフェルトの墓について
5. 小山 彰 新エジプト語 i.sDm=f 構文の機能について
6. 藤井 信之 アレクサンドロスの到来とエジプト人—前4世紀のエジプト側史料の検討から
7. 平山 洋 ピラミッドテキストにみるオシリス神信仰とその性格について
8. 銭廣 健人 葬送用コーンの編年について
9. 山花 京子・秋山 慎一 古代エジプトの青銅生産についての文献学・考古学的考察

第4会場

1. 鷺見 朗子 百一夜物語—その起源と内容
2. 西尾 哲夫・小林 一枝 挿絵入りアラビアンナイト写本（マンチェスター大学所蔵 706）の内容と系統について
3. 中野さやか アッバース朝宮廷における詩の政治的役割
4. 辻 圭秋 詩篇 128 篇 2 節に関するイスラーイーリーヤートの考察
5. 栗山 保之 アラブのインド洋航海技術書の成立
6. 榮谷 温子 アラビア語エジプト方言で書かれた新聞記事の関係詞と関係節
7. 森下 信子 アラビア語版「サラーマーンとイブサール物語」の資料解題
8. 澤田 萌 クシャイリーの『書簡』にみられるマラーマティー（被虐主義者）の思想的影響
9. 倉澤 理 ジュワイニー（イマームル・ハラマイン）とアブドゥル・ジャッバルの思弁・知識論の比較考察
10. 中西 悠喜 ファナーリー存在論における〈関係〉—〈存在〉の内在／超越をめぐる
11. 浜本 一典 イスラーム法学における帰納的推論

第5会場

1. 青木 健 イラン・イスラーム共和国におけるゾロアスター教アラビア語・近世ペルシア語写本研究
2. 大東 敬典 バンダレ・アッバースにおけるイギリス東インド会社商館のブローカー
3. 遠藤健太郎 近代イランの説教師と都市社会—立憲革命期テヘランにおけるセイエド・ジャマーロッディーンを中心に
4. 山崎 和美 イランの女子近代教育と婦人雑誌
5. 石川 真作 ドイツにおけるトルコ・アレヴィーの展開
6. 高橋 圭 デルヴィーシュとダウサー近代エジプトにおけるタリーカの表象と「宗教」概念
7. 三代川寛子 エジプト・ナショナリズムとコプト
8. 柳谷あゆみ ヒドゥマの成立・解消・維持についての考察—ザンギー朝期（1127-1234 年）の事例を中心に
9. 長谷部史彦 18 世紀初頭マハッラ・クブラーにおける反ズルム運動の性格について
10. 小笠原弘幸 『トルコ史概要草稿』の分析—トルコ共和国公定歴史学についての一視角

11. 小野 亮介　ゼキ・ヴェリディ・トガンのトルキスタン観—1930年前後の活動と議論を中心に

ポスターセッション

1. 近藤 二郎　早稲田大学エジプト学研究所の調査 (I) アブ・シール南遺跡、
(II)ダハシュール北遺跡、(III) ルクソール西岸岩窟墓調査
2. 中町 信孝　オスマン朝時代のアラビア語写本—トルコ・イスラム美術博物館 2155-2162 写本をめぐって
3. 西秋 良宏・安倍 雅史・門脇 誠二・久米 正吾
ユーフラテス河中流域の先史遺跡 (第二、第三次踏査報告)
4. 長谷川敦章・常木 晃
青銅器時代ユーフラテス河中流域の拠点集落—テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査
5. 花坂 哲　エジプト・アコリス遺跡調査 2009
6. 村上 尚子・常木 晃　北西シリア、テル・エル・ケルクの新石器時代の墓地

研究発表要旨

(以下の要旨は、大会後に発表者に改めて執筆を依頼したものであり、大会で配布された要旨集に掲載されたものとは異なる場合があります。)

第1会場

1. 西アジア新石器時代の井戸——シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡で見つかった PPNB 後期の新資料をめぐって——

西秋 良宏

新石器時代の開始はドメスティケーションで特徴づけられるが、その対象は動植物にとどまらなかったらしい。鉱物や景観、さらには社会までもが意図的に改変され始めた。新石器時代の水路やダム、井戸などが発見され始めたことから、当時の集団が水のドメスティケーションに乗り出していた可能性についても近年、議論されるようになってきている。本発表では、シリアのテル・セクル・アル・アヘイマル遺跡で発見された先土器新石器時代の井戸をとりあげ、当時の水の扱いをめぐり問題について考察する。

遺跡はシリア東北部、ハブール平原にある。見つかった井戸は直径が上部で径 2m 強、底部で約 1m、深さは約 4m あった。放射性炭素年代によれば 9000 年前頃、いわゆる PPNB 後期の末に位置づけられる。この井戸が提起する主な論点は次の 3 つである。

第一に、井戸の分布。西アジアの先土器新石器時代から土器新石器時代初頭の井戸で既知の事例はいずれも地中海沿岸に位置している。最古とされるキプロス島のシロロカンボス遺跡 (約 11000-10000 年前)、地中海岸イスラエルのアトリトヤム遺跡 (9000 年前)、同じくイスラエル、シャア・ハゴラン遺跡の例 (8200-8400 年前頃) などが代表的である。テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡における発見は、井戸掘削による水資源のコントロールはかなり一般的な行為であり、レヴァント地方だけでなく遠く北メソポタミアでも実施されていたことを示す。

第二に、井戸の立地。テル・セクル・アル・アヘイマルはハブール川本流に面している。新石器時代においてもこの川に水が流れていたことは確実であるから、井戸の掘削は単なる水資源獲得を目的としたものではなかったと考えられる。農耕牧畜の発展、成立期であった PPNB 後期という時代背景を考えると、家畜飼育、人口増などによって河川の汚染が生じていた可能性が高い。この井戸は浄水を得る目的では掘られたのではないかと推察される。であれば河川沿いの井戸としては最古の事例の一つとなる。

第三に、井戸の扱い。井戸の底からは完形の美しい磨り石が 10 数点出土した。破損品ではないから廃棄物とは考えられない。井戸に超自然的な力が秘められていると考える慣習は現代でも各地で見られる。当時既に、そのような観点があり、井戸の掘削、使用、廃棄にあたって何らかの儀礼がおこなわれていた可能性も考察すべきである。

2. 古代パレスティナのオリーブ油生産——前2千年紀後半の円形搾油施設をめぐって——

小野塚拓造

パレスティナにおけるオリーブ油生産は、鉄器時代後半に産業化したことが知られている。本発表で扱う円形搾油施設は、後期青銅器時代末期から鉄器時代初頭にかけて展開した搾油施設であり、オリーブ油の大量生産が始まる前段階のオリーブ油生産を示していると考えられる。円形搾油施設と考えられる遺構は20世紀前半に行われた発掘調査以来、度々報告されているが、その用途については明確にされてこなかった。近年になってようやく、同遺構がオリーブ油の生産施設であったことが確認され、フランケルやベエリによって事例が紹介されている。しかし、円形搾油施設を用いたオリーブ油生産の方法や、同施設が出現した背景についての考察は不十分であった。そこで本発表では、テル・レヘシュ遺跡で新たに検出された円形搾油施設を考察に加え、同施設によるオリーブ油生産とその背景に関する理解を深めることを目的とした。

パレスティナでは銅石器時代以来、石製の臼と石杵を用いるか、岩盤に掘り込まれたカップマークと呼ばれる簡素な設備を利用して、オリーブ油生産が行われた。また、ほぼ同様の方法が20世紀初頭にも多用されていたことが、民族誌や最近の民族考古学的研究によって明らかにされている。こうした事例は、家族内で消費する少量のオリーブ油を生産する目的であれば、手の込んだ構造の搾油施設を構築する必要がないことを示しており、円形搾油施設が出現した背景には別の目的も存在していたと考えるべきである。本発表では、円形搾油施設の床面積と果汁を受けるための容器を、オリーブ油の大量生産を行っていた鉄器時代後半の事例と比較し、同施設を用いたオリーブ油生産について考察を行った。その結果、円形搾油施設の構造が、オリーブの実をより大量に効率よく破砕する作業に適していることが明確となった。一方で円形搾油施設は効率的な圧搾作業には適さなかったようである。円形搾油施設によるオリーブ油の生産量を復元することは困難であるが、同施設が導入された背景には、少なくとも、より多量のオリーブ油を生産しようとする意図があったと考えられる。円形搾油施設によるオリーブ油生産は、パレスティナにおけるオリーブ油産業の「さきがけ」として捉えることができる。

3. 後期新石器時代の南レヴァント地方における鎌刃のデザインと製作技術

門脇 誠二

南レヴァント地方の後期新石器時代では(6,400-5,200 cal. BC)、食糧生産経済が前期から継続して発達する一方で、人間社会や物質文化には大きな変化が起こった可能性が広く知られている。後期新石器時代には土器が出現するだけでなく、前期新石器時代の大型集落における居住が断絶し、小規模な村落が散在するパターンが現われる。また、石器製作技術や建築物の構造、埋葬儀礼などの面で変化が認められる。また、後期新石器時代の特徴として、地域的多样化が指摘されている。地中海沿岸から死海地溝帯、ヨルダン西部の地域にかけて少なくとも3つの考古学文化(ヤルムーク文化、ロド文化、ワディ・ラバ文化)が認められている。

この様に後期新石器時代の社会像は未だ断片的である。遺跡の小型化や地域的多样化という現象の背後にある人間社会を明らかにすることが大きな課題である。この問題を掲げ、北ヨルダン、ジクラブ渓谷における後期新石器時代遺跡の調査がトロント大学によって進められている。これまでの調査の結果、ワディ沿いに分散した小型村落が社会交流を保ちながら地域共同体を形成していたのではないかと考えられている。

こうした研究状況を背景に、筆者はジクラブ渓谷に位置する2つのワディ・ラバ文化遺跡(タバカト・アル＝ブーマとアル＝バサティン)から出土した鎌刃を資料として用い、2遺跡間および他地域の同時代遺跡から出土した鎌刃と比較検討を行った。今回の分析では、タバカト・アル＝ブーマ遺跡の資料を居住期ごとに分け、時期的な変異も考慮に入れた。その結果、鎌刃の形態、素材の形態、二次加工技術の点で通時的な変化と同時に地域的な多様性も存在することが認められた。その一方、鋸歯縁状刃部の頻度は通時的に変化せず、ジクラブ渓谷の地理的特徴であると思われる。

分析の結果、ワディ・ラバ文化期の鎌刃の形態と製作技術には、重層的な空間変異が認められる。つまり、ワディ・ラバ文化遺跡全体に共通する特徴、ジクラブ渓谷に認められる特徴、そして個々の遺跡を特徴づける属性である。ジクラブ渓谷の特徴は、この地域に居住する農耕民の社会交流を示す一方、村落ごとに見られる技術行為の差は、各村落で鎌刃が製作されていた生産体制を示唆すると解釈した。今後、土器や生業活動に見られる地域性の研究とも連動

させ、分散した小型村落が構成する地域共同体についてさらに肉づけを行っていききたい。

4. フェニキアの海外発展と宗教の伝播

佐藤 育子

フェニキアで崇拝された神々は、すでに青銅器時代のカナンで崇拝されていた神々の系譜に連なるものであるが、多神教の名残をとどめながらも、鉄器時代のフェニキアでもっとも崇められた神々は各都市の守護をつかさどる一対の男神と女神であった。たとえば、ビュブロスではバアラト・ゲバルとバアル・シャメン、シドンではエシュムンとアシュタルテ、そしてテュロスではメルカルトとアシュタルテがそれぞれ最高神の地位を占めた。

なかでもテュロスは、前 10 世紀頃にはフェニキア諸都市の中でもっとも有力な都市となり、それに連動するかのようにはテュロスの主神であるメルカルトやアシュタルテの祭儀も高揚を見る。さらにこの頃よりテュロスに主導されたフェニキアの海外発展にともなって、地中海各地にはフェニキアの宗教的伝統が移植されたが、特にメルカルト神の崇拝は、「ヘラクレスの柱」と呼ばれたジブラルタル海峡を越えて現在のスペイン南西部にまで伝播した。

このような植民都市では母市伝来の宗教祭儀が行われ、海外発展初期における神殿の果たした役割は、単に宗教的領域のみならず政治的・経済的分野にまで及び、母市と植民都市を結ぶ紐帯としてその後も長く機能したと考えられる。

さて、カルタゴ建設の背景に潜む伝承は、カルタゴが祝福を受けて建設された「新しい町」ではなく、本国の政争に敗れたものたちにとっての「逃れの町」であったことを指摘する。フェニキア語で記された史料が皆無である以上、すでにこの伝承が他者のフィルターを通して我々に届けられたものであることは否めないが、背後には、当時のテュロスをめぐる複雑な国際関係（特に強国アッシリアとの関係）が投影されている可能性があり、交易ルートを巡って母市と植民市との間に何らかの確執が存在した可能性も想起させる。

だが、各植民都市におけるその宗教的浸透度は押し並べて一様ではない。フェニキア最大の植民都市であるカルタゴでは、ある時期から本国の伝統と決別し、バアル・ハモンとタニトという一対の男神と女神が、メルカルトやアシュタルテを凌駕して主神の座を獲得することになっていく。前 6 世紀半ば頃と考えられるこの時期は、テュロスが西方での海上覇権を喪失し、徐々にその比重が母市テュロスからカルタゴへと移って行く次期に相当する。母市テュロスの伝統を受け継ぎながらも、地中海に栄えた様々な文化との出会いは、カルタゴを盟主とするフェニキア・ポエニ世界に共通の宗教現象を生み出す一方、植民都市間における相違も生じさせることとなった。

以上のような観点から、本発表では、フェニキアの海外発展にともなう宗教伝播の背景を、植民都市と本国、さらには植民都市間の関係に着目し、地中海世界における海上覇権の問題とも関連させ、文献・碑文・図像等の史料から探ってみた。

5. トルコ南東部、オロンテス河下流域の考古学調査——1999 年から 2008 年の成果——

西山 真一

トルコ南東部、ハタイ県に位置するオロンテス河下流域は、古来より地中海世界と西アジア世界の接点の 1 つとして歴史上重要な役割を果たしてきたと推測されてきた。この地域には、先史時代からの居住跡が確認されているアムーク平原、古代ギリシアと西アジアとの交流を示すアル・ミナ遺跡、そしてヘレニズム～ローマ時代の大都市アンティオキア（現在のハタイ県の県都アンタキア）が位置している。しかし、この地域の考古学情報はこれまで 1930-40 年代に行われた限られた考古学調査の成果に頼っていた現状がある。

この考古学的に未踏査の地域を多く含むオロンテス河下流域の考古学プロジェクトは 1999 年に開始された。プロジェクト当初は、シカゴ大学東京研究所と地元の Musafa Kemal 大学による共同調査であり、アンタキアからオロンテス河が地中海に注ぐオロンテス河デルタ地帯までを調査範囲とした。2002 年からはムスタファ・ケマル大学調査団（団長：Hatice Pamir）の単独調査となり、現在では「オロンテス河下流域考古学プロジェクト」としてオロンテス河流域だけでなく、その南東に広がる山岳地帯も調査地域（総面積約 1600 平方キロ）として考古学的踏査と発掘調査を実施している。本発表では、発表者も参加してきた過去 10 年に渡るこのプロジェクトのハイライトを紹介し、調査の意義と今後の展望について言及した。

主な成果として、まずほとんど未踏査であったデルタ地帯と河口からアンタキアまでのオロンテス河流域の溪谷で

は 100 件近くの新たな遺跡を登録した。また、これまで所在不明であった、アル・ミナとサブーニエを再発見することに成功した。2004 年よりアンティオキア・ダフネ地域の踏査が開始され、これまで知られていなかった古代アンティオキア周辺の防御システム、墓地や村落の分布、水路システムなどが明らかになりつつある。2007 年からは、山岳地帯のアルティンオズ・ヤイラダー地域の踏査が開始され、ヘレニズム～ビザンツ時代の遺跡と共にアッシリア風のレリーフがある遺跡やテル型遺跡が記録された。最後に、2008 年より開始されたサブーニエの発掘調査では地中海との交流を示す証拠が出土し始めている。プロジェクトは、これまで知られていなかったオロンテス河下流域が、東地中海地域における重要な文化交流の結節点であることを具体的に明らかにしつつある。

6. イスラエル鉄器時代出土土器に見られる「生命の木」の意義

杉本 智俊

イスラエルでは、後期青銅器時代には「生命の木」等の図像が二彩あるいは単彩で描かれた土器が特徴とされるが、鉄器時代には無文の赤色化粧土器に変化するとされている。ところが、最近テル・レヘシュ（前 11-10 世紀頃）、エルサレム（前 7 世紀?）の鉄器時代の層から大型の貯蔵壺に「生命の木」の図像が刻印されたものが出土し、クンティレト・アジュールでも「生命の木」等さまざまな図像や碑文がインクで記された大型の貯蔵壺（前 8 世紀）が検出されている。

これらは、一見すると後期青銅器時代（カナン時代）の精神世界が鉄器時代（イスラエル時代）に継承されたことを反映しているように見えるが、この図像の表象世界の変遷を分析すると、そのように単純な解釈は不十分であることがあきらかとなる。本発表では、以下の 2 つの側面から、青銅器時代と鉄器時代の「生命の木」の意味の違いを論じた。

まず、「生命の木」の持つ意義の変化をそれが描かれた時代毎の遺物の総体から再構成し、そこにこれらの壺を位置づけた。結果として、中期青銅器時代～後期青銅器時代には「生命の木」は女性器とともに豊穡女神と関連しているのに対し、鉄器時代 I 期～鉄器時代 II A 期になるとこの関連性は不明確になり、鉄器時代 II B-C 期にはむしろ男神と関連していることが示された。すなわち、イスラエル王国時代には「生命の木」は豊穡女神ではなく、ヤハウエの祝福の象徴となった可能性が高い。結果として、鉄器時代の土器に見られる「生命の木」も新しい意味で理解すべきであると論じられた。

第二に、クンティレト・アジュール出土の壺の碑文と図像から、鉄器時代のイスラエルにおける「生命の木」の意味を考察した。碑文には「ヤハウエとそのアシェラ」という表現が含まれており、このアシェラはカナン時代の豊穡女神がヤハウエの配偶神になったものだと解釈されることがあるが、その解釈は文法的に不可能で、聖書にもそれを支持する明確な証拠はないことが示された。また、ヤハウエとその配偶神を描いた図像も存在せず、「生命の木」自体にも女神を示す要素はないことが指摘された。

これらふたつの議論から、元来豊穡女神と関連のあった「生命の木」は、イスラエル時代に入るとヤハウエ崇拝に取り込まれ、ヤハウエの祝福の象徴として用いられたことが論じられた。また、この理解は発表者がすでに提案しているイスラエルにおけるヤハウエ神教成立のモデルと合致していることが指摘された。

7. 天理参考館所蔵テル・ゼロール出土のアンフォラ印影

長谷川修一

1964-1966 年の 3 シーズンに亘り、日本オリエント学会は西アジア文化遺跡発掘調査団を組織し、イスラエルに派遣した。発掘調査の対象となったのは「シャロン平野」と呼ばれるイスラエル海岸平野部の中央やや北寄りに位置するテル・ゼロールであった。同遺跡は、地中海海岸から 9 キロほど内陸に位置し、海岸平野と東に位置するサマリア山地とを結ぶ交通の要所であったとされる。テルは南北に細長く、北と南にそれぞれ小高い丘を形成している。また、二つの丘を結ぶ鞍部があり、同部分をも合わせた総面積は 4 ヘクタール弱である。発掘調査の結果、同遺跡には中期青銅器時代からマムルーク朝時代に至るまでの文化層が確認された。そのうち、ヘレニズム時代から初期ローマ時代にかけての居住層（第 IV-III 層）が北の丘で検出された。

これらヘレニズム・ローマ時代の層からは、数点の印影つきアンフォラ把手が出土している。特にロードス島に起源を持つアンフォラには、エボニムと呼ばれる年ごとに異なる人名が多く押されていることから、それらがアンフォ

ラ製作年の年代決定、ひいてはアンフォラがその内容物とともに搬入された時期の年代を決定する上で特に重要である。これらテル・ゼロールから出土した印影のうち、ヘレニズム時代に属するロードス島起源二点はイスラエル考古局との合意のもと、発掘後に日本側で保管することとなった。この二点の印影は現在、天理大学附属天理参考館に保管されているが、これまでそこに刻まれた文字は解読されずにいた。発表者は天理参考館のご厚意により、2009年3月にこれら二点のアンフォラ印影を実見する機会を得た。本発表では、この二点のアンフォラ印影の解読結果を発表し、近年のロードス島起源アンフォラ把手印影のエポニム編年研究に照らし合わせてそこに刻まれている人名（エポニム名・製作者名）から得た印影製作の年代を提案した。導き出された年代から、当時のシャロン平野とエーゲ海地域との交易について考察を加え、ヘレニズム時代におけるテル・ゼロールの歴史的な位置づけを確認した。

8. イスラエルにおける国立公園/自然公園の変遷

岡田 真弓

本発表では、イスラエルにおける文化資源活用と社会との関係性を考察するために、イスラエル政府から指定を受けた公園を対象として、公園が指定された各時期の社会状況と照らし合わせて、国立の公園の変遷を追うことを目的とする。

分析として、国立公園/自然公園が政府から指定を受けた年と各公園の入場者数の検証を行った。その結果、国立公園/自然公園の変遷に関して二つの見解を得た。一つ目は、国立公園/自然公園がイスラエル国建国後約20年は、文化だけでなく外交政策や内政の一環としての役割を果たし、また自然景観や考古遺跡からイスラエルの土地や歴史がユダヤ人としてのアイデンティティを強める場所として存在した可能性を指摘できたことである。1960年代から1970年代の公園指定状況を見てみると、公園の指定が国家の土地利用政策の一環として行われたり、水源保全の為の政策と関係しており、外交や環境に係わる政策の影響を受けていた様子が伺える。また、当時期に旧約聖書での重要な都市やイスラエル王国に繁栄した都市遺跡が国立公園として指定されていることは、建国当初から当地域に残るユダヤ民族（教）の歴史に係わる遺跡が新しい国家建設の歴史的拠り所であると認識されていたと論じられている具体的事例となり得る。

二つ目の見解は、国立公園/自然公園に対する作り手側（イスラエル自然公園局）と受け手側（国内外からの来観客）の意識変化が見られることである。1990年代前後から既存の公園にキャンプ場が併設される動きが見られる。これは近年イスラエルで増加している旅行形態・田園観光 Rural Tourism の影響が考え得る。つまり、以前は遺跡や景観を通して当地への帰属意識を感じる場所としての役割を担ってきた国立公園/自然公園が、現在では歴史や自然景観をこれまでのようにただ見るのではなく「体験」する場所として需要・需要されている可能性が指摘できた。また、紀元後に属するものが主要な遺構として残っている場所、特に当時のユダヤ人の活動とは直接関係がない過去の営みに対しても公園化がなされたことは、イスラエルに限らず各地で文化観光の流れが教養主義的な人文主義の伝統と結びついた単一文化の概念から多様な文化・歴史観へと変化したことや、更にイスラエル社会における宗教的世俗派の増加などの要因との関係を指摘することができた。

第2会場

1. 『(バビロン天文) 日誌』における *Bābilāya, mār Bābili*

三津間康幸

前331/0年にアレクサンドロス大王がバビロンに入城して以降、前323年の大王の死に続くディアドコイ戦争を経て、前305/4-前141/0年にかけてのセレウコス朝のバビロン支配期、そしてその後のアルシヤク朝支配期の初期まで（前1世紀前半まで）のバビロンにおける政治的・宗教的事件の記述を豊富に含むアッカド語楔形文字資料には、同時代にバビロンの主神マルドゥクの神殿エサギルに奉職した学者たちによって継続的に作成された『日誌』と呼ばれる多数の資料および「年代誌」と呼ばれるジャンルに属する19点の資料がある。『日誌』と「年代誌」に属する各資料の間には内容上、書式上で様々な類似点があるので、これらの資料の中に現れる同一あるいは類似の語句や表現は、同一・類似の意味や用法を持つものであるということが本発表の前提である。

本発表では『日誌』および「年代誌」を中心資料として、これらの資料の中で前4世紀後半から前1世紀前半にかけてのバビロンに土着的であった住人を表すために使われた「バビロン人 *Bābilāya*」と「バビロンの子ら *mārē Bābili*」

という語句の用法の違いと、「バビロンの子ら」とエサギルの代表者集団との関係とについて次のことを明らかにした。まず「バビロン人」がバビロンに土着的な住人集団の全体を表し得る一方、そのうちの代表的存在が「バビロンの子ら」あるいは「1人のバビロンの子」と呼ばれている。さらに複数形の「バビロンの子ら」が『日誌』や「年代誌」で言及される事例は前4世紀後半と前3世紀前半の事件の記録に集中し、またその場合の「バビロンの子ら」はエサギルの代表者たちのことを指して使われている。一方『日誌』や「年代誌」における前3世紀後半から前1世紀前半の事件の記録や、前3世紀前半から前1世紀前半にかけてのバビロンで作成された契約・財政文書では、エサギルの代表者集団は「エサギルの議長 (*šatammu*) と、エサギルの議会 (*kiništu*) のバビロン人」という形、あるいはそれに類似する形で表されている。しかし『日誌』『年代誌』の記述によれば、少なくとも前3世紀後半から前2世紀後半にかけても単数・複数の「バビロンの子(ら)」がエサギルの代表者集団を構成したり、「エサギルの議長」や「エサギルの議会」のために何らかの役割を果たしたりしていた。そして「バビロンの子ら」の少なくとも一部はエサギルの代表者集団の中で重要な位置を占めていた。

2. ウルク期の王権

前田 徹

発表者は、都市国家の独立性・自立性（都市国家的伝統）を中心に据えた前3千年紀メソポタミア王権の研究を続ける中で、19世紀的パラダイムである東洋的専制国家、民族、氏族制度・族長体制を再検討すべき課題として捉えてきた。例えば、シュメール人とアッカド人は、華夷の区分によって自らを中心文明を共に担うものと意識しており、彼らの間で民族が主要な対立点になったことはない。さらに、メソポタミアにおいて氏族制度が意味を持つこととなるのは、遊牧民マルトゥが政治的社会的に独自の地歩を固めるべく、政治主体が都市にあるというシュメール・アッカドの伝統的理念に対抗して、氏族制度を基盤とすることで都市に根差さない族長体制を生み出したときからである。族長体制の確立は前2千年紀前半であり、前3千年紀ではない。加えて、氏族の意味を持つとされるシュメール語 *im-ru-a* と、アッカド語 *illatu* は前3千年紀において、ともに氏族の意味で使われないことから、都市国家と王権においては氏族制は重要な要素にならない。

こうした結論を得たことで、前4千年紀のウルク期の王権を、原始共同体の観点から説明する19世紀以来の研究姿勢をも俎上にのせるべきであると考えに至った。ただし、問題が大きく、明確な根拠を挙げることはできず、ここでは、問題提起にとどめざるをえない。

ダイメル・シュナダー、チュメネフ、ディアコノフ、ジェイコブセン、アダムスなど多くの研究者が、ウルク期を共同体社会と見なして、ウルク期からの歴史を原始共同体の解体過程として捉えている。前3千年紀に氏族制度などが都市の王権にとって意味を持たないとする発表者の結論からは、前3千年紀を原始共同体の解体過程と見ることはできないのであり、したがって、ウルク期を共同対社会と見ることにも疑念が生じる。

発表者は、ウルク期に成立した巨大な都市を、社会的分業の効率化と巨大化を可能にする超密な人口を集積した場と捉える。この立場から、ウルク期の王は、原始共同体を背景とするのではなく、生産・非生産両部門を含む分業的社会を統括する者であり、複雑な都市全体をコントロールする十全な意味で独自の権力を持った王として認めることができる。

3. アルシャク朝パルティアのイラン暦法考

春田 晴郎

アルシャク朝パルティア時代のイラン暦については、従来それほどの根拠が示されることなく、バビロニアと同じ春新年であろうとする記述が多かった。

しかし、最近になって Agnes Korn は、ニサー陶片文書において「新しい」葡萄酒の納入記録が1番目の月とされる *prwrtyn* においてもなされている事実注目し、葡萄酒の製造サイクルから見て *prwrtyn* が春では遅すぎることを指摘したうえで、ニサー文書の暦においてもセレウコス朝の公式暦であったマケドニア方式と同じように新年は秋に始まる、との説を唱えた。

コルンの新説は説得力が高く、少なくともニサー文書の暦において当時春新年が採られていた可能性はほぼ否定されたといつて良いだろうが、それでも以下の重大な弱点が指摘できる。

まず、アルシヤク朝領内のギリシア都市とイラン高原発信の王文書などと同一マケドニア方式が採られていたとすると、セレウコス紀元とアルシヤク紀元との年数の差は常に64年となるはずだが、僅かとはいえ差が65年のテキストが存在することである。また、コルンは葡萄酒の製造において、干し葡萄から作る製法のことを考慮していないため、実際には新年が初冬に始まっていたとしても、彼女の論拠からは矛盾しないことも挙げられる。

発表者は、これらの点も踏まえて、アルシヤク朝パルティア時代のイラン暦は、おおよそ冬に新年が始まること、そしてその新年は固定されていたものではなく次第に秋にずれつつあった、すなわち彼らはハハーマニシュ朝前半に導入された1年365日固定閏なしの純然たるゾロアスター教暦を遵守していた、と考えれば様々な資料を矛盾なく説明できることを示す。これは、W. B. Henningがアウロマン文書No. 3やスーサ出土アルタバーン4世碑文の日付比定に用いていた暦法とほぼ同じであるが、ヘニングは自身の暦換算法を明示していなかったため、暦法についての認識が他の研究者には共有されないまま現在にまで至っていた。

4. ダレル溪谷プグッチ遺跡に関する伝承——パキスタン北部地方『法頭伝』現地調査：2008—— 土谷 遥子

ダレル溪谷は、法頭が北天竺に入って最初に訪れた『陀歴』と比定される。

『陀歴』は法頭伝に『葱嶺を渡り終ればそこは北印度である。始めてその境に入ると、一小国あり、陀歴という。…多くの僧がおり、皆小乗学である。…昔この國にいた羅漢が、一人の巧匠を連れ兜術天に上り、彌勒菩薩の身の丈や色貌を見せて還り下り、木を刻んでその像を作らせた。…像は長さ八丈、斉日には常に光明がある。諸国の王は競って供養を盛んにした。[この像は]いま(401 A.D.)なおここに現存している』(長沢和俊訳、東洋文庫)と記述されている。

ダレル溪谷の調査は、1991年に『法頭の道』の調査を始めて以来の課題であったが、本溪谷特有の部族抗争で恐怖の谷として知られ、外国調査隊の調査は不可能とされた。諦めずに努力し、調査開始7年目の1998年、始めてダレル入りが実現した。まず法頭が巡礼した彌勒大仏像のあった寺院遺跡と思われる、プグッチ村の高台にあるプグッチ遺跡(通称 university)の調査を実施した。

プグッチ村から125m高台の、南北に方形(約80m x 30m)の土塀周壁のある敷地に、東に正門、門前に泉水、敷地上部中央に本殿址らしい切り石を覆う土塁等、『寺院址』の特長が認められたが、『要塞』風の城壁や構築址はなかった。ダレル溪谷に類似遺跡のない事を確認し、この特異な遺跡の伝承をプグッチ村民に聞き調査を2008年に実施した。農民、技師、学者、医者、公務員等の男性(20代-70代)に面接を行った結果、世代、職業、教育等の相違にも拘わらず、全員が一貫して以下の、ほぼ共通の解釈をしていることが判明した。(1)『仏教寺院』とする。(2)ダレルの溪谷中、最も安全な要地にあり敵の侵入ルート、バタフン峠を望む。(3)巨像(仏像)が礼拝の中心であった。大仏は金製(18-28トン)とする中、法頭の記述同様、木製とする見解もあった。仏像の高さを、一人が、法頭の八丈と同じく24mとした。(4)古代仏教世界の大巡礼地、学問の中心であった。(5)求法僧『法頭』を知る者は誰一人いなかった。

プグッチ村民は、古来から伝承されてきたプグッチ遺跡に関する見解を語った。その内容は、外部からの影響を全く受けておらず、イスラム保守派の村の純粋な伝承であり、本遺跡が仏教寺院址であった可能性を示唆するものと見られる。法頭の記述に非常に類似している点に留意しつつ、本伝承の検証を試みたい。

5. エジプト・ダハジュール北遺跡 2008年調査報告

矢澤 健

吉村作治・サイバー大学学長が隊長を務める早稲田大学・サイバー大学合同調査隊は、ダハジュール北遺跡の調査において、これまでに「イパイ」、「パシェドゥ」、「タ」の新王国時代のトゥームチャペルとその周辺に点在するシャフト墓、単純埋葬の発掘を行ってきた。2004年からは「タ」の墓周辺で調査を行っており、中・新王国時代の未盗掘の埋葬が複数発見されている。2008年も「タ」の墓周辺の調査を継続した。

1~2月の第14次調査では、「タ」墓周辺の19におよぶシャフト墓群、3つの単純埋葬と1つのピット墓の発掘を行った。シャフト墓の内17基は入口の長軸が南北方向であり、埋葬室は一部を除いてほとんどが南側に掘削されていた。全て盗掘を受けていたが、内部からは中王国時代の土器群や木棺片などが出土した。一方で入口の長軸方向が

東西のものも2例あり、シャフト88からは新王国時代第19王朝以降に年代付けられる木棺片や、大量の人骨が出土している。

6～7月の第15次調査も「タ」墓周辺の未掘シャフト墓群の発掘を実施した。全部で7基発掘を行っており、内6基は長軸が南北方向であった。内部からは、土器片、木片、骨辺、レリーフ片などが出土した。一方で長軸が東西方向のシャフト86は深さ7.6m、上下2層の構造で、A～E室の5室を持つシャフトであることが判明した。シャフト86B室からは、2点のシャブティボックスの蓋が発見されており、そのうち1点はアヌビスの彫像が蓋上部に取り付けられていた。もう1点は低いポールト状であり、所有者と思われるパエンレヌウという名前が記載されていた。最下部のE室からは、最低4体の人形木棺が確認されている。2体は背景が黒色であり、もう2体は黄色と考えられる。黄色の木棺は着衣型であることや、透かし彫りのミイラ・カバーが発見されていることから、この埋葬の年代は第19王朝以降と推測される。

11～12月の第16次調査では、「タ」墓東側部分の除去、「タ」墓周辺未掘墓の調査、発掘区の北側への拡張を実施した。「タ」墓東側部分を除去した結果、埋葬は確認できなかったが、木製の芯にプラスターで形作られた人型の像の頭部と足部が埋納されたピットが検出された。

また「タ」墓周辺では、全部で8基のシャフト墓の発掘を実施した。主な成果として、シャフト68では、埋葬室の入口からプタハエムウイアの名前が刻まれた2本の石灰岩脇柱が、間口として再利用された形で出土した。また、シャフト110からは、ラムセス朝期以降に年代付けられる木製の二重人形棺が2体出土した。木棺は黒色の背景に黄色で碑文が書かれており、碑文は各所に間違いが見られることから、文字がわからない者によって装飾された可能性が指摘できる。「タ」の墓周辺墓域の年代や性格を検討する上で、重要な資料になると考えられる。

6. ケルク土器をめぐる諸問題

小高 敬寛

シリア北西部ルージュ盆地の考古学的調査による特筆すべき成果の一つは、いわゆるケルク土器 *Kerkh Ware* の発見である。北レヴァントでは新石器時代を通じて、暗色磨研土器 *Dark-faced Burnished Ware* が常に土器アセンブリの主体を占め続けたが、ケルク土器は前7000年頃に出現した当地で最古の土器と目され、暗色系の器面やミガキ調整、鉤物の混和といった技術的特徴の連続性から、暗色磨研土器の最も古いタイプに位置づけられる。一方でケルク土器は、以上の諸特徴に加え、口径20cm内外の単純な鉢形に限られる器形や装飾の乏しさといった点で、近年トルコ南東部からシリア北部一帯で報告されている最古級の土器群と共通している。すなわち、北レヴァント地域のヴァリエーションとして最古級の土器群に連なる。

ところで、これまでの知見に基づくと、ケルク土器を含む暗色磨研土器はスサを混和した明色系の粗製土器と常に相伴して出土する。つまり、暗色磨研土器は土器アセンブリのなかで主体的であるとともに、いわゆる精製土器としての位置を占める。その割合はアセンブリ全体の7～8割前後で一定しており、当地域では土器製作の開始当初から土器の「精製」と「粗製」の区別が明確に意識されていたようにみえる。

しかし、トルコ南東部からシリア北部における最古級の土器群のうち、北レヴァントより東側でみつかった事例には、他種の土器を伴わずに出土したものがある。これらの事例は当該地域で最古の土器アセンブリを示すと考えられるが、続いて加わるスサを混和した明色系の土器は、時期が下るにつれアセンブリに占める割合を増し、やがて最古級の土器と置き換わる。ここでは北レヴァント地域と違い、最古級の土器＝精製、スサ混和の明色系土器＝粗製という意識はなかったようだ。

したがって、ケルク土器とより東方の最古級の土器は類似しているものの、それぞれの土器アセンブリに占める位置は大きく異なる。この現象の解釈にはいくつかの可能性を提示できるが、明確な答えを得るには更なる資料の集積が必要であろう。だが、土器の興隆とそれをめぐる地域間交流を探るうえで極めて重要な点であり、今後も注視すべき問題として提起しておきたい。少なくとも土器アセンブリの地域的相違は、両者を跨いで設定されている「先ハラフ *Pre-Halaf*」の概念に再考を促す。

7. メソポタミアの粘土板（文書）と古環境

渡辺千香子

2008年度の総合地球環境学研究所におけるFS研究として、「メソポタミア文明における王朝の興亡と環境」について研究をおこなった。研究の目的は、メソポタミアのウル第三王朝前後の数百年間にわたる時代（紀元前2500—前1750年頃）に焦点をあて、王朝の興亡と環境変化の関わりを総合的に考察することである。なかでも「塩害」が社会に与えた影響、ならびに農耕や牧畜といった人間の活動が環境に与えた影響を総合的に考察することを目指す。

従来の文献研究では、ウル第三王朝の衰退原因として挙げられる農業生産高の減少要因として、深刻な「塩害」の可能性が指摘されてきた。1958年に『サイエンス』に発表された Jacobsen & Adams の論文はじめ、前川和也(1974)、ギブソン(1974)、フォスター(1986)によって、収穫高減少の問題が様々に解釈されてきたが、塩害説に慎重な見直しを提言したパウエル(1985)の論文を最後に、この問題は本格的に議論されることなく今日に至っている。一方、土壌物理学では、メソポタミア文明は塩害で滅びたとする見解があたかも定説であるかのように広まっている。

本研究は、これまで科学的に検証されることのなかった塩害問題について、はじめて客観的かつ体系的に検証する。なかでも、粘土板文書に使われている「粘土」の分析を通じて、当時の自然環境の変化をたどる。特に経済文書と呼ばれる小型の粘土板に注目し、文書に書かれた年月日をもとに、これらを「日付入りの土壌サンプル」として扱う。これは従来の調査に較べて、はるかに高精度な年代確定を伴い、古環境の変化を細かい時間推移とともにたどることを可能にする。

昨年度8月には、大英博物館に収蔵されるウンマの粘土板を顕微鏡で詳細に観察し、世界ではじめて「珪藻」を発見した。珪藻は、真水から海水まで幅広く分布する藻類で、その種を特定することによって、塩分濃度など珪藻が生息していた本来の水環境を復元することができる生物指標である。9月には、エール大学収蔵の粘土板の化学組成を中性子放射化分析によって調査したほか、帯磁率の測定もおこなった。このような鉱物・化学組成等のデータは、文書に記された内容から推測される粘土板の産地を科学的に同定する手段であり、生物指標のデータの推移を特定地域の環境変化と結びつけるのに欠かせない。

第3会場

1. エジプト・ヒエラコンポリス遺跡の加熱・焼成施設の発掘調査

馬場 匡浩

エジプト南部に位置するヒエラコンポリス遺跡は、先王朝時代で最大規模を誇り、かつ初期国家形成期（前4000年頃）において重要な役割を演じた中心的遺跡とされる。遺構は低位砂漠に広く分布するが、2003年から開始した涸れ谷内のHK11C Operation Bの発掘調査により、土器の焼成と食物の加工を目的とした2つの異なる加熱施設が発見された。調査の終結を目標に実施した2009年の発掘により遺構の全容がほぼ明らかとなった。そこで本発表では、これまでの調査成果を総括しつつ、検出された加熱・焼成施設の構造と熱利用技術について復元的考察を提示することを目的とした。

Operation Bでは上下2層が確認され、熱利用施設はその下層にあたる。時期は土器の特徴からナカダ2期前半（前3800～3650年頃）と推察される。食物加工用の加熱施設とされる遺構は、直径50～85cmの大甕を地中に埋めて土器片と大石で固定し、外面を粘土でコーティングしたもので、それが5基、2列に配されている。どれも残存状況は極めて良く、大甕の内部には液体が凝固した黒色で光沢のある残滓が付着する。植物学的分析では、麦芽のエンマーコムギが多く含有していることが判明し、低温加熱を求めたその構造的工夫や被熱状況からも、ビール醸造地であった可能性が高いと提案した。

一方の土器焼成施設は、大甕群の南側に位置し、直径60～70cmのピットの形状をなす。ピットは5つ検出され、どれも背後に高さ40cmほどの壁体を有する。明確な窯構造でない限り土器焼成施設と認定するのは難しいが、ピット内部には灰と炭化物、過焼成土器片と焼土が厚く体積し、背後に灰原があることから、これらが土器焼成のピット窯であったと考えられる。問題はその焼成方法となるが、遺構の状況からでは判断できない。その手がかりとなるのが土器に残る黒斑の分析である。下層で出土する器形は60%以上がスサ混粗製胎土のモデルド・リム壺でありここでの主な製品と考えられるが、黒斑分析に望ましいとされる完形に近い資料は当遺構では皆無に等しい。そこで、近郊のエリート墓地で出土した同一器形の土器群28点を対象として、黒斑の種類と付着位置から、設置の角度と配置、積み重ねの有無などを考察した。結果、横倒しの角度で、底部を中心にに向けた花びら状に並べ、三段分壁体に立て掛

けるように積み重ねて焼いたと想定した。かつ、接触黒斑のみを残す焼成良好の資料が半数存在することから、覆い型野焼きによる焼成復原案を提示した。

2. ルクソール西岸ウセルハト墓 (TT47) の調査

近藤 二郎

エジプトのルクソール市西岸に位置するネクロポリス・テーベには、新王国時代を中心とする高官の岩窟墓が多数存在している。第 18 王朝アメンヘテプ 3 世 (在位：前 1388～前 1351 年頃) 治世の末期になると、テーベ西岸に墓内壁面に精緻なレリーフを施した比較的大型の岩窟墓が登場するようになる。ウセルハト墓 (TT.47)、アメンエムハト・スレル墓 (TT.48)、ラモーゼ墓 (TT.55)、カエムハト墓 (TT.57)、ケルエフ墓 (TT.192) などの岩窟墓がこれにあっている。

これらの墓の中で、アル=コーカ地区にあるウセルハト墓(TT.47)はアメンヘテプ 3 世の王妃ティイの家令であった人物の墓で、1902 年 12 月～1903 年 1 月頃にクルナ村のオムダにより発掘調査が実施され、当時、エジプト考古局の上エジプト主任査察官であったハワード・カーターが考古局の年報 (*Annales du Service des Antiquités de l’Egypte*) で作業報告を記している。それによれば、墓の位置は「クルナ村のオムダの家の背後から約 50m」また「前庭部の規模が 13m×9m、2 列の 6 本の柱を備える前室が 22m×8m、2 本の柱を持つ奥室が 10m×7m」などの遺構の規模と構造に関する記載やウセルハトの葬送用コーン及びティイ王妃のレリーフの写真など掲載されている。その後、カーターの後に上エジプト主任査察官の職に就いたウェイゴールも、ルクソール西岸岩窟墓の登録作業報告の中で第 47 号墓に言及している。しかし、カーターの報告した王妃ティイのレリーフは、ウェイゴールの 1908 年夏の岩窟墓登録作業時には発見されておらず、おそらく 1903 年から 1908 年の間に墓外に持ち去られ、ベルギーのブリュッセル王立博物館の収蔵品に加えられたと考えられる。

それ以降、墓は厚い砂礫に覆われ、墓の正確な場所もいつしか不明となり、アクセスができなくなっていた。ウセルハト墓 (TT.47) は、アメンヘテプ 3 世時代の重要な岩窟墓であるにもかかわらず、正確なプランや構造が不明であるため、この墓の再発見・再調査が必要不可欠であるとの結論に至った。そのため、2007 年 12 月からウセルハト墓の本格的な発掘調査を開始し、これまでに第 1 次調査 (2007 年 12 月～2008 年 1 月)、第 2 次調査 (2008 年 12 月～2009 年 1 月) を実施することができた。第 2 次調査では、レリーフ装飾のある墓の入口上部を再発見することができた。

本発表では、これまでの発掘調査の概要、及び第 2 次調査で再発見された墓入口上部のレリーフ図像について報告するものである。特に墓入口上部のリンテルのレリーフ装飾は、同時代のケルエフ墓 (TT.192) のレリーフ図像と極めて類似したものであり、注目されるものである。また、第 3 次発掘調査は、2009 年 12 月に実施予定であり、今後の調査計画についても具体的に説明していきたい。

3. マディーナト・グラープ 20/21 号墓の再検討

和田浩一郎

本発表は、マディーナト・グラープ遺跡で発掘された墳墓の検討を通して、同遺跡の変遷に新たな知見を加えることを目的としたものである。

マディーナト・グラープ遺跡は、ファイユーム地域の入り口に位置する都市遺跡である。ピートリは 19 世紀末にこの遺跡の調査を実施し、大規模な周壁遺構や家屋群、いくつかの墳墓を検出した。調査の成果からピートリらイギリスの研究者たちは、この遺跡を新王国時代・第 18 王朝のトトメス 3 世治世下に建設された、神殿を中心とした町と考えた。一方ドイツのボルヒアルトは、この町の中心的施設を王宮と推測した。1970 年代以降、マディーナト・グラープの出土資料や関連の文字資料が再検討され、同遺跡は「メルウル (あるいはミウル) のハレム」と呼ばれる王宮であったことが判明している。

同遺跡に関する研究の中でひとつ問題点となるのは、この町の変遷である。ピートリは神殿がラメセス 2 世治世下に解体され、その上に居住域が形成されたという変遷を推測した。1980～90 年代にかけグラープの研究を進めたマーサ・ベルもまた、第 19 王朝の前半に王宮が放棄され、別の場所に再建されたという見解を示した。またラコヴァラによる 1980 年代の土層観察では、第 18 王朝と第 19 王朝の間に居住の空白期間が存在していた可能性が指摘されて

いる。しかし王宮の放棄・再建には、異議をとなえる研究者もいる。そこで本発表では、20/21号墓を検証材料としてこの問題を検証した。

20/21号墓は、「ハレム」の北に広がっていた居住域の下層から発見された。約2.4~3mの浅いシャフトの下にふたつの埋葬室が設けられており、ピートリはそれぞれを独立した墓とみなして20/21号の番号を割り振った。この墓からは木製の女性像やシャブティ、青色彩文土器が出土し、また「シェのハレムの行政官」ネフェルメヌウと「メルウルのハレムの補佐官」イウンエントウレシュという、ふたりの人物の木棺も検出されている。これらの副葬品や被葬者を検証した結果、町の変遷にまで踏み込む知見は得られなかったものの、この墓が「ハレム」の行政に関わる有力なアジア系の一族に属していたこと、またその使用期間はアメンヘテプ3世治世後半から第19王朝初頭にかけてであったことが推測された。さらにこの墓の放棄は、同時期に行政機構が刷新された可能性を示唆すると推測された。

4. エジプト、アブ・シール南丘陵頂部で発見された新王国時代のトゥーム・チャペルとイシスネフェルトの墓について 河合 望・吉村 作治

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1991年よりアブ・シール南丘陵遺跡にて調査を継続してきた。丘陵頂部の発掘では新王国時代第19王朝ラメセス2世の第4王子カエムワセトの石造建造物および第18王朝アメンヘテプ2世およびトメス4世に関連する日乾煉瓦建造物を発見した。2001年より丘陵斜面部の発掘を実施し、初期王朝時代末から古王国時代初期および中王国時代に使用の痕跡のある遺構を検出した。2007年に丘陵斜面の発掘が概ね終了したことを受け、再び丘陵の頂部で発掘調査をおこなった。その結果、カエムワセトの石造建造物から北東約40mの地点から新王国時代のトゥーム・チャペルを発見した。

トゥーム・チャペルは、著しく崩壊しているが、塔門、奥に列柱を配する中庭、角柱を配する奥室、礼拝室から構成され、その背後にピラミッドを配した平面プランである。建造物全体が石灰岩で造られ、背後にピラミッドを有していることから新王国時代第19王朝に特徴的なトゥーム・チャペルであることが判明した。また、特筆すべきこととして、他の同時代のトゥーム・チャペルとは異なり、入口を南側に向けていることが挙げられる。調査の結果、トゥーム・チャペルからは、レリーフを施した石材、柱、梁などの石材は全く出土しなかった。また、円柱の礎石も仕上げも粗雑であった。遺物もハンマー・ストーンや漆喰の付いた土器が多く出土していた。さらに、中央の礼拝室付近からは偽扉を構成していたと思われる赤色花崗岩の破片が多数出土した。このようなことから、トゥーム・チャペルは未完成であったことが推察された。

トゥーム・チャペル内には未完成のシャフトが2か所検出されたが、北西角の付近を調査したところ、ピラミッドの基礎部の西側から埋葬室にシャフトが発見された。シャフトは岩盤を鉛直に掘り下げ、底部の東側に下降する通路を経て、埋葬室に繋がっていた。埋葬室は既に盗掘を受け、石棺の破片が散乱していた。埋葬室の南西角付近には石棺の本体があり、装飾された銘文から「高貴な女性、イシスネフェルト」という女性のものであることが判明した。

同時代の文字資料から、被葬者イシスネフェルトの同定に関するいくつかの可能性を指摘したが、彼女の石棺がカエムワセト王子の好む復古主義的な特徴を持つこと、付近のカエムワセト王子の石造建造物との位置関係から、被葬者イシスネフェルトはカエムワセトの娘である可能性が高いことを指摘した。

5. 新エジプト語 i.sDm=f 構文の機能について 小山 彰

新エジプト語の i.sDm=f 構文は、ポロツキー H.J. Polotsky による研究以降、i.ir=f sDm 構文とともに第2時制、すなわち副詞付加語を焦点化する構文とされてきた。さらにカッソーネ P. Cassonnet による第2時制の包括的な研究では、この構文が「意志」、「願望」、「指令」および「義務」といった話し手／書き手の心的態度をあわせて表現する、「ムードの第2時制」であると理解されている。

しかしこの構文の用例を詳細に検討すると、副詞付加語のみが焦点化されているとは考えにくい事例が存在する。たとえば、以下の「ヨッパ攻略」からの一節もその一つである。

〔文脈〕 反乱を起したヨッパの町を征圧しようとする将軍ジェフティが、籠に潜ませた兵士たちをヨッパ内部へ送り込むために、町の防御を解かせるための虚言を敵方に伝達させている。

「行って、そなたの女主人に(次のように)告げよ。『お喜び下さい!』」

i.di <n>=n swtx DHwty Hna Hmt=f Xrdw=f (LES 84, 5)

訳例 1 : 『セト神がジェフティを、彼の妻、彼の子どもたちとともに、与えて下さったのは、我々にです』

訳例 2 : 『セト神が我々にジェフティを、彼の妻、彼の子どもたちとともに、与えて下さったのです』

i.sDm=f 構文が第 2 時制であるならば、焦点化されるのは与格 n=n 「我々に」となるが、項焦点の構文である「ハ分裂文」を用いてそのように訳出した邦語訳（訳例 1）は、この場面では不自然に感じられる。この不自然さの原因は、この邦語訳の前提部に含まれる「セト神がジェフティとその家族を与えた」という意味内容も、文脈上、聞き手／読み手にとって与格と同等に価値の高い情報を担っていることにあると判断される。そのことはまた、文全体を焦点化する文焦点の機能を示す「ムードの『のだ』」を用いた邦語訳（訳例 2）が、先行発話に対する理由としての適確な解釈を与えることから示される。

本発表では上記の点に着目し、i.sDm=f 構文の機能は、副詞付加語のみではなく、中エジプト語の S_{pw} 構文と同様に文全体を焦点化することにあるとする仮説を提示した。そして「用例の意味解釈」、「否定形式」、および「疑問副詞類との共起」という 3 つの観点から検証を行うことにより、本仮説の有効性を確認した。

6. アレクサンドロスの到来とエジプト人——前 4 世紀のエジプト側史料の検討から——

藤井 信之

アレクサンドロスは、ペルシア支配からの解放者としてエジプト人に歓迎されたとされることが多い。これはディオドロスなどの古典史料に基づくものである。しかしこれら古典史料が事の真相をどれだけ正確に伝えているかは、検討を要する問題である。特に近年、古典史料に基づいたペルシア像の再考が進んでいもいる。そこで本発表では、「エジプト人がアレクサンドロスをもどのように迎えたか」という問題を、前 4 世紀のエジプト側の史料を検討することによって考察した。

まず第 2 次ペルシア支配期が 10 年程の短期間であったこと、そしてこの短期間の間に一時ペルシアはエジプトを追われ、エジプトはカババシュ王によって支配されたことを確認した。第 2 次ペルシア支配期とされる 10 年間は、支配者が目まぐるしく交代した激動期であった。したがって第 1 次ペルシア支配期（第 27 王朝）のような安定した政権を第 2 次ペルシア支配期には考えることができない。古典史料が伝えるメンフィスやメンデスの聖獣に対する不敬については、今のところ同時代史料からは肯定も否定もできない状況である。

第 2 次ペルシア支配期に関わる碑文史料を検討すると、ヘラクレオポリスやヘルモポリスの有力神官の自伝碑文には、ペルシア王への悪意は示されていない。むしろペルシア王の寵を得たことが特筆されている例がある。またヘルモポリスの碑文から復元できる系譜は、ペルシア王がヘルモポリスの神官制や神官団のあり方に強力に介入することはなかったということを示している。アルマントの聖獣ブキスの葬送ステラでは、アレクサンドロスと共にダリウス 3 世の名がエジプト王として刻されている。しかしサトラップ・ステラでは、下エジプトの聖地プトの神殿領をペルシア王が没収したことを伝えている。

以上の検討から、ペルシアの支配に対して、上エジプトと下エジプトでは受け取り方が異なっていたと考えられることが指摘された。ペルシアの再征服によって大きな影響を受けた下エジプトでは、在地の有力者が没落し、ペルシアに対する反感が強まったであろう。しかしペルシアの再征服の影響が限られていた上エジプトでは、在地の有力者がペルシア支配下で存続し、その寵を得る者もあった。したがって古典史料が伝えるようにアレクサンドロスを歓迎したのは、下エジプトの有力者達であって、上エジプトでは新たな未知の征服者として当初は警戒されたであろう。

7. ピラミッドテキストにみるオシリス神信仰とその性格について

平山 洋

オシリス信仰は古代エジプト全時代を通じ、古代エジプト葬送概念の中心的な役割を担っているのは周知の通りである。オシリス信仰の研究にはギザ・サッカラ・アビュドス・ブシリス等のピラミッド・神殿・墳墓・遺物の考古学的考察は言うまでもなく、図像学・ミイラ研究等様々な分野が関わるが、オシリス信仰の性格そのものを直接語りかけてくれる文字資料、言語学研究、特にピラミッドテキストの研究は必要不可欠である。またオシリスの名はピラミッド以外の墳墓の碑文にも多数確認出来、両者を文字資料と考古資料の両面から比較検討する必要がある。言語学的にはオシリス名wsirは数種のヒエログリフの構成要素から為っており、この構成要素がどのように由来・発展して来たか考察する必要がある。

オシリス神は元々守護神である犬神のジャッカルから発展したものと考えられる。アビュドスの初期王朝時代の王墓から発見された王の印章にはアビュドスの地方神であるケンティアメンティウ神が王の接頭辞として用いられている。その後、ケンティアメンティウ神は国家的神のオシリスにとって代わられたと考えられる。その根拠は墳墓の主に偽扉に描かれた葬送文に含まれる接頭辞の複雑なバリエーションから考察する事が可能である。しかし第5王朝、第6王朝の墳墓の碑文からオシリスはアビュドスよりはむしろデルタのブシリスと多く関わっており、オシリスの下エジプト起源の検証が必要である。

オシリス神がピラミッドテキストに初めて登場するのは第5王朝末期ウナス王のピラミッドにおいてである。ピラミッドテキストとオシリス信仰の関係は1980年代にイギリスのJ. Gwyn Griffithsにより研究が為されており、テキストの中でオシリス神がどのように描かれているかその意味毎に分類している。しかし、Griffithsの研究以降新たにピラミッドテキストの存在が確認され、その文書が刊行され、現在その全体を再度研究する必要がある。発表ではウナス王のテキストを例にピラミッドテキストに含まれるオシリス名を全て抜き出し、それが含まれる文がどのような内容・性格のものか、ピラミッド内部のどの部屋どの箇所に描かれているのか、ピラミッド内部構造の性格上の問題とどう関わるのかを検証した。まずオシリス名が現れるのは玄室西側壁面頂部の一例であり、続いて3段からなる北側壁面には供養再生の秘儀の中でオシリスは王ウナスの接頭辞として多数用いられる。しかしオシリスが王の形容詞として登場するのは玄室においてのみであり、控えの間では神々の一つとして捉えられる等、様々な分析が可能である。

また、近年のN. Cherpion, M. Baud, P. Piacentiniによる古王国時代墳墓の考古学的編年・碑文研究を元に墳墓に記されたオシリス神名wsirを割り出し、その全てをオリジナル報告書で確認作業を行った結果、wsirが現れるのは主に第5王朝、古くはダハシュール遺跡を発掘したDe Morganの報告書の第4王朝スネフル王の時代に属する墳墓にまで遡って確認出来た。このオシリス名は犬神（アヌビス）と同程度に重視されているかのように文字が配置されている事も注目し得る。これらのオシリス名もピラミッドテキスト同様、墳墓のどの部位からのものか、ヒエログリフの構成要素はどうなっているかを検証した。ピラミッドテキストのオシリス名は構成要素が単一的なのに対し、墳墓からのヒエログリフの構成は多様性に富んでいること等が分かった。

発表は筆者の研究の全貌を示す事に力点が置かれ、テーマが多岐に渡り過ぎたため題目からやや逸脱し個々の分析や解釈による成果には時間の制約上多くに触れる事が出来なかった。今後は個々のテーマに絞って成果を発表し、改めて全体像を提示したい。

8. 葬送用コーンの編年について

銭廣 健人

初めてコーンに言及したのはヒエログリフの解読で有名なシャンポリオンで、1827年のことであった。彼はそこでコーンの機能に言及している。学史の始まりから機能の探求に重点が置かれてきたコーンは、残念ながら180年たった今にいたるも判然としない。これまでは様々な説が20世紀前半までに提出されてきた。しかしそれ以降は新たなアイデアが出されぬまま、漠然と「太陽の象徴説」「供物のパンの象徴説」「建材としてのハリ説」の3者が唱えられることが多い。

このような状況の中、2005年にリバプール大学の博士号請求論文として著されたコーンの論文で、著者のAl-Thibi氏ははじめて本格的にコーンの編年に言及した。彼が編年を扱った理由の一つは、それがコーンの機能を解明する足

掛かりになるからである。彼はアメンヘテプ3世以降に mAa-xrw xr Asir (オシリス神のもとで声正しき者) またはその派生形である mAa-xrw xr nTr aA (大いなる神のもとで声正しき者) という表現が消滅し、オシリス神の代わりに太陽神へ言及する文言が出現することを指摘した。そして最終的な結論として「コーンの機能は時代ごとに異なっていた」としつつも、その後の太陽神一神教への改革という社会情勢も念頭に入れつつ「アメンヘテプ3世時代以降はコーンは太陽の象徴であった」と述べている。

しかしながら彼の作成したデータベースには誤入力や年代づけが不明確な個所が見受けられる。さらに、「太陽神へ言及する文言が出現する」とはいえ、それはたかだか一人分二種類にすぎない。そこで発表者は自前でデータベースを作成し、それをもとに彼の説を検証した。結果、時代を経るにつれオシリス神への言及が増え、逆に太陽神への言及はいつの時代もほとんど、あるいは全く言及されていないという、Al-Thibi 氏の主張とは程遠いデータを得た。確かに彼の言うとおりに、mAa-xrw xr Asir や mAa-xrw xr nTr aA という表現は消えている。しかし jmAxy xr Asjr という表現は逆に増加しているために全体としてオシリス神への言及が増加していたことが判明した。

本発表の意義は、必ずしもコーンの機能を解明できたわけではないものの、編年の分析を通じて有力な説の一つに疑問を投げかけたところにある。

9. 古代エジプトの青銅生産についての文献学的・考古学的考察

秋山 慎一・山花 京子

本発表では、古代エジプト新王国時代の青銅生産を中心に取り上げ、1) 銅と青銅生産の概要を把握したのち、2) 壁画資料にはどのような工程があらわされているのか、3) 金属生産にかかわる遺物や遺構から何の生産がどのように行われていたのか、そして4) 文献資料には金属に関するどのような記述が残されているのかを紹介し検討する。

まず、古代エジプトが採掘していたのはシナイ半島やワディ・アラバ、東部砂漠やブヘン近郊の鉱山である。銅鉱山では金属銅を製錬し、鋳型に入れて成型したのち消費地に送っていた。

新王国時代には金属工房関連の壁画資料が8件残されており、その壁画は2場面に大別される。ひとつは鋳造の場面、もう一つは鍛造の場面である。いずれも金属加工の最終段階を示しており、金属の製(精)錬に関する図像は皆無である。一方、朝貢図では牛革(オックスハイド)型などの金属塊がもたらされている場面がある。ほぼ同時代のウルブルンの沈船からは牛革型をした銅や錫塊が多数発見されており、「地金」として流通していたことがわかる。

金属生産に関してエジプトで発掘された遺物や遺構は少なく、シナイ半島の銅鉱山、カンティールの金属精錬址くらいである。セラビト・エル=カーディムからは小型の斧、鑿、鏡などの鋳型が出土しており、牛革型などの大きな「地金」用の鋳型はない。カンティールからは牛革型の金属塊が1点出土しているが、鉛同位体分析によりキプロスからの搬入品であることが判明した。

文献資料から銅あるいは青銅の存在を確認する作業には、まず金属を表す語の同定から困難が伴う。現在銅あるいは青銅を意味する語の読みとしては伝統的に biA と読まれてきたが、他にも Hmt, bDt が考えられている。いずれの読みであれ、サインは N34 およびそれに関連するヴァリエントであり、この音価およびサインをメルクマールに文字的資料を蒐集したところ、そのほぼ全てが何らかの意味での「完成品」であり、当該金属を加工するあるいはそれに直接関連するような言及は極めて少ないことが明らかとなった。

現在判明している資料だけでは古代エジプトにおける金属生産は、金属を作る段階ではなく、加工する最終段階のみが強調されているように見受けられる。

第4会場

1. 『百一夜物語』——その起源と内容——

鷲見 朗子

『百一夜物語』とは、マグリブで流布し、編まれたと推測される『千一夜物語』の流れをくむアラビア語の説話集である。アラビア語原題をミアト・ライラ・ワ・ライラといい、『千一夜物語』同様、枠物語で始まり、複数の物語が語り手によって百一夜かけて語られる構造になっている。また、『百一夜物語』の枠物語の内容は『千一夜物語』の枠物語のそれと類似しているほか、『百一夜物語』で語られる物語のなかには、『千一夜物語』のなかにも含まれているものもある。

『百一夜物語』には現在7つの写本が見つかっており、そのうち3つはパリのフランス国立図書館に、2つはチュニジア国立図書館に、そして2つは個人所有とされる。印刷本としては、チュニジア人研究者マフムード・タルシューナのアラビア語校訂本(1979年)がある。またフランス語訳として、1911年にフランスのGaudefroy-Demombynesがパリで刊行した*Les cent et une nuits, traduites de l'Arabe*がある。本発表で用いた『百一夜物語』のテキストは、主にマフムード・タルシューナのアラビア語校訂本(1979年)である。

まず、上述の7つの写本のうち5つからそれぞれ数葉ずつの写本画像を提示しながら、その書体や大きさ、物語の順序などの比較を行った。次に、『百一夜物語』の枠物語に焦点をあて、『千一夜物語』の枠物語との比較を行いながら、枠物語のもととなったとされているインド説話との関係を物語の内容から考察した。

(本発表は平成18年度～22年度科研費研究「アラビアンナイトの形成過程とオリエンタリズム的文学空間創出メカニズムの解明」(研究代表者:西尾哲夫)の助成を受けたものである。)

2. 挿絵入りアラビアンナイト写本(マンチェスター大学所蔵写本706)の内容と系統について

西尾 哲夫・小林 一枝

アラビアンナイト(千一夜物語)のアラビア語写本は、①アントワーヌ・ガランによるフランス語訳(1704～1717)出現以前(17世紀以前)に作成されたものと、②ガラン訳出現以降に作成されたものに分けて考える必要がある。中世の中東イスラーム世界におけるアラビアンナイトの原型テキストを再構するためには、17世紀以前ならびに18世紀以降の原典テキスト分布ならびに物語構成の相関関係を総合的に分析する必要がある。

マンチェスター大学のジョン・ライランズ図書館(John Rylands Library)には、これまでに二種類のアラビア語写本の存在が知られていた。一つは、ガラン版以後の写本でラッセル写本と呼ばれている。同写本はガラン写本と同系のシリア系写本から、ラッセル本人もしくはラッセルの依頼によって写されたものである。書写時期は新しいが、ガラン以前の内容を伝える貴重なテキストであり、アラビアンナイト原型写本の復元をこころみたまフディーも、ガラン写本とならんでこのラッセル写本を主要な底本としている。

もう一つの写本は、ガラン以前の十六世紀前半のもたとされている。同写本は第二百五十五夜から始まっており、ペルシアの王に語られたハイラカーンの陸と海の冒険の物語、ペルシアの王と二人の長老の物語、そしてバグダードとホラサーンの王、ウマル・アンヌウマーンと彼の子どもと孫たちの物語が含まれている。同写本には欠損部分がかかなり多くあり、ド・サシの門下生であったヴァルシー(今では偽アリババ写本の作者として有名)が、パリの国立図書館に現在も所蔵されているマイエ写本をもとにして欠落部分を補填したらしい。主要な物語が多く含まれていないことや、内容が主流の写本群と大きく異なっていること、さらには近代になって修正(あるいは改竄)が加えられたということもあり、同写本には29枚もの挿絵(カラー)が含まれており、現存する挿絵入りアラビアンナイト写本としては最古の写本であるにもかかわらず、これまでのアラビアンナイト写本研究ではまったくと言っていいほど分析の対象となつてこなかった。

本発表では、この挿絵入りアラビアンナイト写本(マンチェスター大学所蔵写本706)の内容と系統について、写本に含まれる物語の内容の面と、中世イスラーム世界における挿絵入り写本との関係の面から考察した。

3. アッバース朝宮廷の官僚選抜の基準としての修辞学(バラガ)と詩——マームーンからムタワッキルの治世を中心に——

中野さやか

発表では、アッバース朝カリフ権の安定期であるマームーン親政後からムタワッキルが殺害されるまでの9世紀前半の官僚登用を取り上げた。この時期のカリフによるワジール選抜や官僚の台頭には、バラガ(修辞学)と詩才が重視されたが、このような教養・学識がなぜ官僚選抜の基準となり得たのかを分析した。

バラガに関しては、マームーン親政後からムタワッキル暗殺までの8人のワジールを分析することで、アラビア語に関する知識や修辞学がワジール就任の直接的要因となっていたことを論じた。これは、国家運営を左右する派閥がなくカリフ親政が行われていた9世紀前半には、ワジールは執政官ではなく、カリフのカーティブ、即ちフトバヤ公文書の最終的な作成者であった為である。その為、この時期のワジール選抜には、出自や派閥、財務処理の能力以

上に、バラガが重視された。またこの時期にバラガは、官職就任の要因となったことで、書記術の基本としてイブン・ムダッビルに位置づけられ、後にイブン・クタイバやアブー・バクル・スーリー達によって体系化された。

マームーン期からムタワッキル期にかけては、詩人が高官やカリフに賞賛詩を捧げることで、地方行政の官職を得る例や、カーティブが賞賛詩を捧げることで、ワジールやカリフの側近となり、政治的に台頭する例が見られる。詩人の官職就任は、報奨金の代わりとして官職を与えられており、地方行政の売官と言える。また政治的影響力を持たないカーティブ達が、賞賛詩を用いて政府内で台頭したことは、中央政府においては、賞賛詩は官職就任の直接的要因にはならなかったが、カリフやワジールの派閥に参加する点においては、有効な手段であったことを示している。このように詩が政治的重要性を持った背景には、アッバース家が8世紀後半からカリフの子弟の教育にジャーヒリーヤ詩を重視し、かつ当時バディーウと呼ばれる新スタイルの詩を隆盛させた大詩人達をナディームとして宮廷に招いた結果、詩才がカリフや高官達の備えるべき教養となったことが挙げられる。

詩は官僚やカリフを始め、宮廷に関わる人々に必要な教養であった為、詩才は宮廷内の派閥形成に必要であった。一方バラガはフトバや公文書の作成に必要な技術であった為、カリフ親政期にはワジール就任の直接要因となったのである。

4. 詩篇 128 篇 2 節に関するイスラーイーリーヤートの考察

辻 圭秋

「イスラーイーリーヤート」という語は、「イスラームに流入した、ユダヤ教・キリスト教等、異教に由来する言説」を指し、通常は「誤った言説」という否定的な意味合いを持つ。この用語は前近代から使われており、その場合の「イスラエル (イスラーイール)」は「ユダヤ教」を意味していた。しかし現代、つまりイスラエル国家建国以降は、前近代の「ユダヤ教」のみを意味するのではなく、場合によってはイスラエル国家をも含意することとなった。

このように「イスラーイーリーヤート」という語は定義が非常に難しく、その使用にも注意が必要であるが、発表者は便宜的に「イスラーイーリーヤート」という語で指示される対象 (言説) を大きく 2 つに分けて考察している。すなわち、①ユダヤ教・キリスト教等の聖典に論拠があるもの (狭義のイスラーイーリーヤート)、②ユダヤ教・キリスト教等の聖典に論拠がないが、大部分のウラマーがイスラーイーリーヤートと見做しているもの (広義のイスラーイーリーヤート) 2 つである。

「イスラーイーリーヤート」はユダヤ教・キリスト教等に由来する言説と見做されているが、実際は民話や伝説の類であると思われるものが多く、ユダヤ教・キリスト教由来であると立証できないものが多い。本発表では I.Goldziher が「イスラーイーリーヤート」として紹介している、イブン・ハッリカーンの著作中に現れる言説を検証する。取り上げるのは詩篇 128 篇 2 節に関する言説であり、ミシュナー・アヴォート 4 章 1 節に含まれる、詩篇の当該箇所註釈が混ざったものである。ヘブライ語聖書、およびそれを註釈するミシュナーを参照することにより、この言説は①ユダヤ教・キリスト教等の聖典に典拠を持つ「狭義のイスラーイーリーヤート」に分類できることを示す。

5. アラブのインド洋航海技術書の成立

栗山 保之

アラビア海とベンガル湾から構成されるインド洋は古来より、地中海北岸のヨーロッパ地域と東アジア地域とを取り結ぶ働きを担っていた。この広大な海洋を往還する具体的な手段は言うまでもなく船であり、そしてその船を安全かつ効率的に運営する技術が、他ならぬ航海技術であった。

前近代におけるインド洋の航海技術に関わる研究では、15 世紀末から 16 世紀初頭にかけてアラビア語で執筆された航海技術に関する複数の書物が利用され、難解な航海技術の実相が明らかになりつつある。ところが、その根本史料として用いられている航海技術を記録した書物それ自体については実のところ、いまだ十分に研究されていない。たとえば、先行研究において航海技術を記した書物は、「航海技術に関する理論的論文」、「航海術テキスト」、「パイロット・ガイド」、「航海マニュアル」などと総称されているものの、これらの書物の特徴や性格の分析、あるいは相互の比較などがなされないまま、今日まで利用されているのである。

そこで本報告では、航海技術を記載した複数の書物を取りあげ、それらの構成や内容を分析することによって、その特徴や性格を考えてみたい。分析の対象とするのは、15 世紀末の航海技術者イブン・マージドが著した『海洋の学

問と基礎に関する有益なる書』と、16世紀初頭の航海技術者スライマーン・アルマフリーの著作『航海科学の精密なる知識におけるマフラの支柱』、『海洋の知識に関する優良なる指針』、『諸原理の序説に関する星々の贈物』である。

これらの書物はいずれも、ポルトガルがインド洋に來航する前後の時期にアラブによって叙述されたものであり、前近代のインド洋におけるアラブの航海技術を検証する上で、第一級の情報を得ることができる非常に重要な史料である。しかしながらイブン・マージドの著作と、スライマーン・アルマフリーのそれとは、同じインド洋の航海技術を記しているにもかかわらず、その記載方法や内容、あるいは対象とする読者の設定などはいささか異なっていた。したがってそれらは、航海技術を記した、いわば「航海技術書」と総称することができるものの、イブン・マージドのそれは航海技術に関わる総合学術書であり、その一方でスライマーン・アルマフリーのそれは純然たる技術書として分類することができるのである。

6. アラビア語エジプト方言で書かれた新聞記事の関係詞と関係節

榮谷 温子

最初に、Abou Hagar (1998)により、話し言葉のエジプト方言の関係代名詞に関する先行研究を概観する。まず、教養ある口語アラビア語(科学、教育、政治等の話題に用いられる)は、口語と正則語のつぎはぎではなく、そこに規則と段階のあることを確認した。

Eid (1988)は、パネルディスカッションでの教養あるエジプト方言の分析で、関係代名詞とそれに後続する語を調査し、関係代名詞が正則語の場合、後続語も正則語だが、関係代名詞が口語の場合は、後続語は口語～正則語であることを見出し、話し言葉がより高いコードに向かうという規則、Directionality Constraint を提案した。

Schulz (1981)は、関係代名詞は先行語のコードスイッチを制限しないと主張したが、具体的数値の提示もなく、データも特定の文化放送からのみという問題点が残る。Al-Ganayni (1988)は関係代名詞の前後には、関係代名詞と同じ変種のみ現れるとしたが、データが特定の人物の同一状況下での発話に限られ、一般的法則とはいえない。そこで、Abou Hagar は、カイロの全放送局から多種の番組を調査し、関係代名詞が正則語の場合、後続語が口語の例が4%見られたが、ほぼ Eid の Directionality Constraint を支持する結果となった。

発表者は、このような規則が、書かれたエジプト方言にも見られるか明らかにすべく、エジプトのエル＝ドストール紙の記事の分析を試みたが、同紙では口語記事は一部の話題のみで、まず、正則語記事か口語記事かの判定が難しかった。更に、母音が表記されないため、正則語と教養語の判定が不可能だった。そこで、分析対象を、エジプト方言ウィキペディアに切り替えたが、すべて口語で書かれてはいても、母音表記はなく、やはり正則語と教養語の判定は難しい。

結果として、口語の関係代名詞の後続語を見ると、Eid (1988)の Directionality Constraint をほぼ支持する様相だが、書き言葉の分析には限界があり、残念ながら、確定的結論を導き出すには至らなかった。さらに、会場から、語彙レベルの基準と形態論レベルの基準が区別されていない等、正則語と口語の判定基準の甘さが指摘された。

7. アラビア語版「サラーマーンとイブサール物語」の資料改題

森下 信子

アラビア語版「サラーマーンとイブサール物語」の三系統の物語の資料状況を俯瞰し、「サラーマーン」と「イブサール」の名、ならびにトゥースィー注釈書への物語内容の伝承経路と、各資料の成立年代の検証を行った。結論は、以下の通りである。年代は西暦で、線矢印は題名、中白矢印は内容の伝承を示す。

アラブ古典の物語 (6世紀中～7世紀初成立、9世紀中記述)

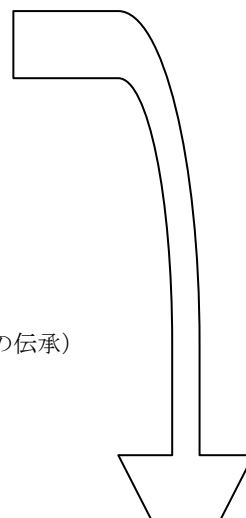


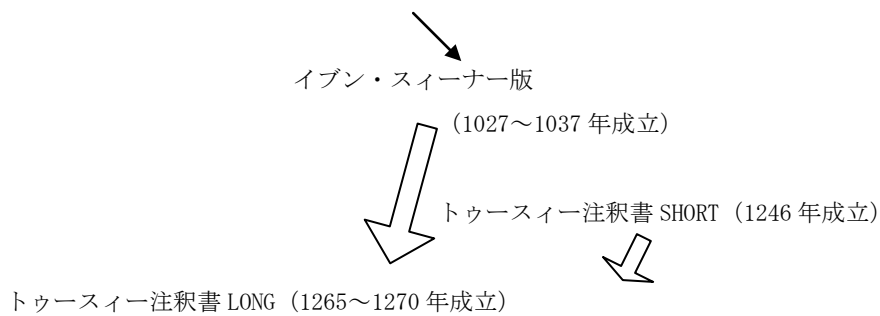
ギリシア語版 — 翻訳 —> アラビア語版ヘルメス主義の物語
(7世紀中～9世紀末成立、9世紀翻訳)

LONG (15世紀まで)

SHORT (976～997年成立)

(アブー・ハサン・ラウカリーの伝承)





質疑の際、意図の理解できない質問があった。結果、説明不足となったことをここで詫び、補足説明を記したい。「同題で異なる内容の作品は一般に多数あるが、それを集めて意味があるか」という主旨の質問と記憶しているが、まず、伝承経路の確立自体が本発表の結論であり、前提ではない。第二・第三系統の関係は反復を割愛し、第一・第二系統の関係について記す。「イブサール」は、通常人物ではなく「サラーマーン」に比べて特異な語である。この二語が、ギリシア語から翻訳されたはずの物語に同時に見られる事実は、第二系統の伝承関係者（訳者・書写生・伝承者）がこれを既存伝承から人物名として借用したか、伝承時に造語したかの二つの可能性を喚起する。借用の場合、その語を含む作品が借用者側に知られたことが前提で、それが第一系統からかそれ以外かの二つが仮定できる。第二系統には、二語が並んで現れる先行伝承（第一系統）が存在した点、善悪像が一致する点、またフナインとイブン・アッラービーは同時期にバグダードで活躍した点も考慮し、発表者は借用説をより適切と判断した。この説を経て、第二・三系統の「イブサール」の読みも限定できる。但し、資料的欠陥に加え、特に最後の点は、フナイン以外の訳者の想定など別問題も孕み、現状で確実なことを述べたい。確実なのは、この物語の題名は、詩節や美句などを使いまわした他の著作の題名の緒例とは、本質的に異なることである。また、この物語の命題は、元々伝承関係者に行われたこと、さらに、この二名が人物名として定着したのはアラビア語版が起源であることも補記しておく。

8. クシャイリーの『書簡』に見られるマラーマティー（被虐主義者）の思想的影響

澤田 萌

元来タサウフは、その原義「羊毛を着ること」から「禁欲的であること」を意味する普通名詞であったが、バグダードの神秘主義者の思想運動を指す名称として自称的に用いられるようになった。そして、このバグダードのタサウフが10世紀初頭のニーシャープールにもたらされ、当地の思想集団であるマラーマティー派を取り込んで拡大したという説が、近年外国人研究者の間で共有されつつある。このニーシャープールにおけるタサウフの展開に着目し、同じくニーシャープール出身のスーフィー、クシャイリー（1072年没）の『書簡』のタサウフ思想に見られるマラーマティーの思想的影響について論じることが、本発表の目的である。

マラーマティー派は、9世紀のニーシャープールに生まれた思想集団で、自己を鋭く非難（マラーマ）し、時として人から非難されるような行為も敢えて行ったことがその名の由来と考えられている。自らの高い精神状態を表すことによって生じる偽善や慢心から魂の純粋さを守ることを目的とした彼らは、人々と同じような服装やふるまいをし、自ら働いて稼ぎを得るなどして精神的高みにある者として他の人々と区別されることを避けた。彼らの秘教的教義は後に、マラーマティーの祖父から学んだニーシャープールのスーフィー、スラミーによって書き残された。その『マラーマティーの書簡』に見られる主要な教義的特徴は、悪しき魂（ナフス）への注視、美德にあふれる青年の理想像であるフトゥーフ、非難の甘受の三つである。

クシャイリーの『書簡』には、これらの三つのマラーマティーの特徴的教義に対応する項目が、直接的あるいは間接的に立てられている。とりわけサッラージュやカラーバーズィーのスーフィー理論書では術語化されなかった魂（ナフス）がクシャイリーで初めて立項されたことは注目すべきである。また「中傷」の項目中の、中傷を受けるという行為そのものが善行という形で自分の利得となるというクシャイリーの考えにも、マラーマティーの影響が色濃くみられる。このような影響関係は、バグダードのタサウフ思想が、それがもたらされた地域特有の思想的特徴を受けて拡大・発展していることを示すものである。今後は地域的特色に配慮したアプローチによって、タサウフへの理解がより厳密で包括的なものとなることが期待される。

9. ジュワイニー（イマームル・ハラマイン）とアブドゥル・ジャッパールの思弁・知識論の比較考察

今回の発表の目的は、代表的なアシュアリー派神学者の1人である、アブル・マアリー・アブドゥルマリク・ジュワイニー (d. 1085) の神学理論体系の根底部分をなす、思弁及び知識の議論におけるキー概念 (指示者・指示対象) を、アブドゥル・ジャッパール (d. 1024/5) の神学理論体系内で用いられるものとの比較により、より詳細に把握することにあつた。ジュワイニーの著作中にはアブドゥル・ジャッパールの名とともにその大著『ムグニー』への言及があり、ジュワイニーが自身の神学理論を構築するにあたり、自派アシュアリー派の先達の見解のみならず、この後期ムッタズィラ派を代表する神学者の作品を参考にした可能性があるということは、イスラーム神学史の流れを考察するにあたり極めて意義深いものと言える。しかし今回の試みは、そのような通史的観点からの興味を満足させるものであるのみならず、思弁・知識といったいわば方法論の議論を分析するにあたって、思想信条で区分された「ムッタズィラ派」、「アシュアリー派」という枠組みの有効性に関して再考の余地を指摘することをも射程に入れたものであつた。

しかしながら、この分析の結果は、新たな問題を喚起することとなつた。それは両者がそれぞれ展開する方法論に、すでにそれぞれの神学体系全体に一貫して通底する世界観・人間観が反映されているという問題である。理論体系全体の構造の大まかな仕組みを予め知るために、その前段階として方法論の分析が必要であるのは確かではある。しかし、方法論の研究はあくまで本題に至るその過程の研究に留まるという点はやはり否定できないのであり、結局のところ体系全体の分析を含めない限り完結しない側面があるのもまた事実である。

このような新たな問題が浮上したとはいえ、共通して使用されるキー概念に、それぞれの神学派の根本原理が反映されることによって、その概念の在り方が全く別の様相を呈するという一例を提示できたことは、新たな比較の視座を得られたという意味において、発表者のジュワイニー研究には極めて大きな成果となつた。

10. ファナーリー存在論における〈関係〉——〈存在〉の内在 / 超越をめぐって——

中西 悠喜

イブン＝アラビー (1240 年没) 思想の諸側面は、彼の死後まもなくからいくつかの批判に晒されてきた。ティームール朝の哲学的神学者タフターザーニー (1389/90 年没) による批判もそのうちの一つである。彼の批判は哲学的諸概念を援用して詳細に展開されており、その矛先は「存在一性論」の理論的側面のみに向けられている。これに対して存在一性論側から反駁を加えたのが、オスマン朝初期の存在一性論者シャムスッディーン・ファナーリー (1431 年没) である。本発表では、彼らの批判と反駁に〈存在〉と神の内在 / 超越という側面から焦点を当て、ファナーリーによる同論の存在論的基礎付けの一端について解明することを目指した。

存在一性論においては、絶対無限定の存在、つまり〈存在〉こそが神 (= 存在必然者) と同定される。しかしタフターザーニーによれば、そのような同定は不可能である。何故なら同論によれば、存在者は〈存在〉をもつものとする為、両者が同定されてしまった場合、芥もくたに至るまでの全ての存在者の存在が、神のそれと同様、必然的になってしまうからである。

ファナーリーはこのような批判を、〈関係〉という概念を定立することで論駁する。彼によれば、タフターザーニーの言う〈存在〉は〈存在〉そのものではない。〈存在〉の〈関係〉 (= 存在者性) である。被造物どもに獲得されるのはこの「存在者性」であって、〈存在〉そのものではない。また神名的諸〈関係〉には、美麗で精妙なものと荘厳で圧倒的なものがある。前者が神の内在の側面を、後者が超越の側面をそれぞれ表す。ファナーリーにとって、完全なる神認識はこれら二つの側面が統合的に把握されなければ実現しない。しかしタフターザーニーは後者の超越の側面からしか神を捉えることができていない。

〈関係〉は一方で被造物どもがもつ存在者性として、他方で美麗 / 荘厳の神名的諸〈関係〉として機能する。これにより、〈存在〉と神が同定されても「あらゆる存在者が存在必然者となる」というタフターザーニーの指摘した矛盾は帰結しなくなり、寧ろ彼のそうした批判自体が不完全な神認識に起因するとして斥けられることになる。以上が本発表における結論である。

(本発表は科学研究費補助金 21・9911 による研究成果の一部である。)

11. イスラーム法学における帰納的推論

浜本 一典

帰納的推論とは、共通の趣旨を含む複数の規定から一般原則を導き出すことをいう。

先行研究によれば、帰納的推論はガザリー(d. 505/1111)によって初めて理論化され、その後シャーティビー(d. 790/1388)により集大成された。ガザリーの時代には、アリストテレス論理学の影響もあり、帰納的推論は蓋然的な知識しか導かないとの見方が支配的であった。ガザリーの法理論においても、帰納的推論は明文がない場合の補充的手段として論じられているに過ぎない。これに対してシャーティビーは、帰納的推論をシャリーア理解における最も重要な解釈法として位置付け、帰納的推論から導かれた一般原則が個々の明文規定の解釈に影響することを認めた。

しかし二人の挙げる具体的な事例を検討すると、実際の解釈の違いはそれほど大きくない。なぜなら、シャーティビーが個々の明文より一般原則を優先するのは必要な場合に限られており、他方ガザリーにも、必要不可欠性を認めて明文に反する解釈を採ったと見られる例があるからである。

だがガザリーは、少なくとも建前としては、明文に反する福利を考慮してはならないと言う。ここには建前と本音の乖離が存在する。私見によれば、この乖離は古典期のシャーフイー派におけるウスール・ル＝フィクフとフルーウ・ル＝フィクフの不整合に原因がある。というのは、シャーフイー(d. 204/820)は、法理論としては類推以外の推論を否定したが、実際の解釈においては必要不可欠性を理由に明文に反する解釈も行っているからである。

類推によっても帰納的推論によっても同じ結論を得ることは可能だが、単一の明文に基づく前者と複数の根拠に基づく後者では、説得力において雲泥の差がある。明文に反する解釈を採用するほどの強い確信は類推によっては得られない。それゆえ、シャーフイーは理論化こそしなかったものの、帰納的思考を行っていたと考えるのが自然であろう。

第5会場

1. イラン・イスラーム共和国におけるアラビア語・近世ペルシア語ゾロアスター教写本

青木 健

ズルヴァーン主義とは、ゾロアスター教の中でも時間を最高神とする一派の名称である。紀元前4世紀から外部資料によって確認され、3世紀のサーサーン王朝時代初期に全盛期を迎えたとされる。この間、グノーシス主義、マニー教、仏教など東西の宗教思想に広く影響を与えたと考えられている。しかし、9世紀までにはゾロアスター教の正統的二元論に駆逐されたらしく、現存するパフラヴィー語写本の中に彼らによる文献は存在していない。

ズルヴァーン主義の唯一の内部資料は、近世ペルシア語文献『ウラマー・イエ・イスラーム(‘*Ulamā-yi Islām*)』(西暦13世紀成立)である。ズルヴァーン主義について述べたギリシア語・アルメニア語・シリア語・アラビア語などの外部資料の正当性は、本書の記述を尺度として当否を判定せざるを得ない。従って、本書はズルヴァーン主義研究に関して他を以って代えがたい重要性を持っており、本書の分析の変動はズルヴァーン主義理解全般に直結する。

今回筆者は、『ウラマー・イエ・イスラーム』の写本がインド西海岸だけでなく、イラン高原でも伝わっている可能性を考慮して、イラン・イスラーム共和国写本図書館のカタログ調査と現地調査を行った。その結果、新出写本Codex A～Eの5つ、引用3ヶ所を探し当てることが出来た。そして、それらを検討した結果、これまでに判明した『ウラマー・イエ・イスラーム』の写本系統を表にしてみよう。

個々の教示書→BK 蒐集版 (1636年 autograph) →BK 編集版 (1876年書写の孫写本)

↓

↓ (?)

↓

Ervad E. K. Antia 所蔵写本

HF 蒐集版 (1644年 autograph) →DH 編集版① (1677年 autograph=SH 写本)

② (1679年 autograph=BU 写本)

③ (1691年 autograph=MU 写本)

① (1677年 autograph=SH 写本) →メヘルジー・ラーナー図書館 MSS 35 (1761年)

// (パラレル)

降に書写、Dhabhar 1932 で活用)

Codex A (1822 年以降に編集)

② (1679 年 autograph=BU 写本) →W 写本 (1761 年頃書写、Wilson 1843 で活用)

// (パラレル)

Codex B (1691 年以降に編集)

③ (1691 年 autograph=MU 写本) →BNF 1022-7 写本 (Olshausen 1829 で活用)

// (パラレル)

Codex B (1691 年以降に編集)

2. バンダレ・アッパースにおけるイギリス東インド会社商館のブローカー

大東 敬典

17 世紀から 18 世紀初めにかけてのペルシア湾の港町バンダレ・アッパースは、サファヴィー朝第一の貿易港であり、イラン高原の諸都市とインド洋に隣接する諸地域を結ぶ海上貿易の一大拠点として機能した。しかし 1720 年代以降、サファヴィー朝崩壊に伴うペルシアの政治的混乱などの影響を受け、港はインド洋世界における海上貿易の拠点としての機能を低下させてゆき、1760 年頃にはその役割を終えたとされる。本報告は、その衰退の構造を、当時港に置かれていたイギリス東インド会社 (EIC) 商館がブローカーとして使用した現地商人を対象に、従来研究では不足していた港の個々の商人の履歴を再現するという作業を行うことによって明らかにした。

EIC 商館のブローカーを代々務めたのはバニヤと呼ばれるインド系商人であり、18 世紀初頭からはグジャラート地方出身であると思われる Chittorah 一族によって担われ、1730 年 4 月以降は Sanchar という人物に引き継がれた。彼らは EIC のペルシアにおける貿易活動に、仲買業務、斡旋業務、貸付業務、貨幣鑑定などを行うことによって幅広く関わるだけでなく、彼らが持つ高い集金能力やネットワークを生かして、商館の運営全般にも携わっていた。

またブローカーは、こうした商館との関係をもとに、商館と現地政権との仲介者としても活動していた。彼らは、少なくとも 1720 年代後半までは、その海軍力によってバンダレ・アッパースの存続に深く関与する EIC 商館と現地政権とを仲介することによって、港社会において大きな影響力を有していたと考えられる。

しかしブローカーをめぐる状況は 1730 年代後半には大きく変化する。1739 年 10 月、商館はブローカーを事実上解任したが、当時の商館の記録を分析すると、ブローカーの経済力が低下したために、商館側がもはや彼との関係に重要性を見出さなくなっていたことが判明する。

EIC 商館のブローカーの事例は、それまでバンダレ・アッパースに秩序を与えてきた現地政権・EIC 商館・そのブローカーという三者の関係が、1720 年代後半には失われたことを示す。それ以後のバンダレ・アッパースは、ブーシェフルが王朝のペルシア湾支配の拠点として台頭する一方、港における商業活動を支えていたインド系商人が没落することによって、東インド会社の活動の場としての性格を強めていったと考えられる。

3. 近代イランの説教師と都市社会——立憲革命期テヘランにおけるセイエド・ジャマーロッドイーンを中心に——

遠藤健太郎

本発表では、近代イランを代表する改革派ウラマー、説教師であるセイエド・ジャマーロッドイーンの、立憲革命期における人的ネットワークを考察した。主に依拠した史料は、「密偵のレポート」と呼ばれる、ジャマーロッドイーンの革命期の活動に関する報告書である。

これによると革命期において彼と関係を有した人物は、主としてウラマー、王族・官吏、手工業者の三つの集団に分類できる。

ウラマーのうち特に重要なのは、セイエド・モハンマド・タバータバーイー、アブドッラー・ベフバハーニー、そしてマレコル・モタキャレミーであった。

タバータバーイーは、ジャマーロッドイーンを自らのモスクにおいて説教させるなど、日常的にもジャマーロッドイーンと最も近い立場にあったモジュタヘドである。しかし、ジャマーロッドイーンの反革命派に対する挑発的な説教や、民兵集団への関与をめぐって、しだいにその関係は微妙なものになっていく。こうした両者の関係の変化は注

目すべきものとして、特に強調した。

ベフバハーニーは、ウラマーの会合等でジャマーロッドイーンとしばしば顔を合わせる関係にあったが、両者の間に強固な信頼関係が醸成されることはなかった。そこには、ベフバハーニーが、かつての宰相アミーノッ・ソルターンと政治的盟友関係にあったことが影を落としていた。

マレコル・モタキャレミーンは、ジャマーロッドイーンと最も親しい説教師であり、説教のみならずアンジョマンでの活動なども共に行っていた。また、民兵を組織し、武装闘争路線を追求したことも、両者の共通点としてあげられる。

次に王族・官吏であるが、特筆すべきことは、ジャマーロッドイーンが反革命派の王族らからも資金援助を受け、時に彼らの意を酌んだ説教を行っていた点である。これは、王族からの資金が説教師にとって重要な収入源であったことと関係している。このほかにも数名の要人の名をあげて個別具体的な事例を紹介した。

手工業者とジャマーロッドイーンの間には、主としてギルド系アンジョマンを通じてのジャマーロッドイーンによる民兵の組織・指導という形で強められた。史料からは個別の業種の名前も明らかになるため、それらにも言及した。

4. イランの女子近代教育と婦人雑誌

山崎 和美

一般に理解されているように、レザー・シャーの政策が 1930 年代後半以降、女子学校教育を大幅に拡大させたのは事実である。しかし、20 世紀初頭（特に 1910 年代から 20 年代）にも女子学校教育が発展していたことが見過ごされている。従って前稿では、当時の教育や学校に関する統計資料と女子教育発展を声高に求めた女性たちの「声」を分析することにより、女子学校教育発展の主導権を握っていたのは、国家ではなく民間の女性たちであることを明らかにし、女子教育の権利をめぐる議論に関して「フェミニズム」の視点から考察することを試みた。

反対派がイスラームやイスラーム法を理由に女子教育への反対を表明したのに対し、擁護派は①イスラームに基づく適正な道徳心の養成（イスラーム的要素）、②愛国心・祖国愛の養成（ナショナリズム的要素）、③家庭の主婦（母・妻）業に必要な欧米由来の近代的な衛生学・家政学の養成（近代合理主義的要素）、を根拠にして女子教育を擁護した。様々な議論の中で、これらの要素は複雑に絡み合い混合された上で主張されていく。

女子教育の要求という女性活動家たちの「フェミニズム」的な「声」からは「近代的イラン女性」という新しい理想的な女性像が浮かび上がる。「欧米由来の近代的な衛生学・家政学の知識を有する家庭の主婦として、家庭で母・妻としての役割を果たし、愛国心を有し、イスラームにねざした適正な道徳心によって子どもや夫を養育する女性」というイメージである。

こうしたことを背景に、婦人雑誌とそこに掲載された女子教育に関する議論について「ナショナリズム」の視点から考察することを本報告の目的とした。婦人雑誌、女子教育観と女子教育の必要性を主張するための戦略、戦略の中から生まれた「近代的イラン女性」像、女性活動家たちの民衆（下からの）ナショナリズム、（30 年代後半以降の）レザー・シャーの公定（上からの）ナショナリズムと女性の活動、という構成で報告した。女性活動家は、女生徒に祖国伝統の手仕事技術を身につけさせ、女子校を国産製品奨励・外国製品ボイコットなどの愛国主義的活動を行う装置として利用した。女性活動家たちという民間の私的なレベル、いわば草の根レベルから発せられた民衆ナショナリズムは、教育や女性の活動が完全に国家の統制下に入れられた 1930 年代における国家の側から発された公定ナショナリズムとは異質なものだと言える。

5. ドイツにおけるトルコ・アレヴィーの展開

石川 真作

アレヴィーは、一般にイスラームにおける一宗派集団として捉えられているが、モスクで礼拝をせず、断食もしない彼らの信仰実践は、一般的なイスラームのイメージとは異なる。その文化は、地域共同体において口承により維持されてきた。

ドイツにおける「トルコ系」移民にもアレヴィー人口が含まれている。その組織化を牽引しているのが、アレヴィー協会連盟である。連盟は現在 100 前後の団体を傘下に置き、大小のイベントや雑誌の発行などの活動を通して、宗

教的独自性よりも文化的独自性を強調する戦略をとり、その認知を広げている。

個々の加盟団体では、儀礼の実践や伝承の収集と共に、楽器や舞踊の教室などの伝承教育が推進されている。ここでは、アレヴィーという、一定の信仰形態を持つ地域共同体とその成員を指すカテゴリーの名称を用いた「想像の共同体」が、トルコというナショナリティを離れたトランスナショナル空間に形成されようとしているといえる。アレヴィーの実践が団体の形成を通して再構成されたのである。

現在連盟が最重要課題の一つとしているのは、ドイツの公立学校での宗教教育への参入である。宗教横断型のカリキュラムを用いているハンブルグや、人口の多いベルリンでは早くから取り入れられた。また、連盟の運動の結果、2007年から2009年にかけて、NRW、バーデン・ヴュルテンベルク、バイエルンで原則共通のカリキュラムによるアレヴィーリッキの授業が開始された。そのほかいくつかの州で導入が検討されている。

連盟は、アレヴィーリッキの授業を通して、地域ごとの実践であったアレヴィーリッキを定式化し、継承していこうとしている。組織化とこれらの定式化を通して、次世代に向けて文化のヘゲモニーを握ろうとしているかに見える。文化行事、儀礼、各種セミナー、継承教育など、様々な活動がその装置として機能している。

(*本調査は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)(1)平成15年度～平成18年度(課題番号16401034)研究課題「「アレヴィー・ベクタシ」集団のエスニシティと社会的・文化的秩序の変化と持続—トルコ・ヨーロッパにおけるトルコ系集団を中心として」(研究代表者:佐島隆)の助成を受けて行われた。)

6. デルヴィーシュとダウサ——近代エジプトにおけるタリーカの表象と「宗教」概念—— 高橋 圭

本発表ではダウサをめぐる様々な言説を概観しながら、19世紀にエジプトを訪れたヨーロッパ人たちのタリーカやイスラームの表象について、その特徴の整理・考察を行った。

ダウサは路上にうつぶせに横たわった信徒たちの上をタリーカ・シャイフが馬で踏みつけながら通る儀礼であり、歴代のシャイフに継承された奇跡によって誰一人これで傷つくことはない信じられていた。この儀礼は恐らく当時エジプトを訪れたヨーロッパ人たちの間で最もよく知られていたタリーカの儀礼であったが、彼らはほぼ例外なくこれをイスラームの後進性を示す習慣として激しい嫌悪感を持って語るようになった。

アルフレッド・バトラーもエジプト滞在中にダウサに衝撃を受け、その廃止を訴え続けた人物の一人であった。彼がダウサを非難した理由はまず何よりもその危険性にあったが、同時に彼はそれが「イスラームの正統な宗教実践」ではないという認識を根拠にしてダウサ批判を展開していた。ただしこのようなイスラームの定義はその内在的理解に基づいてなされたものではなく、明確な教義の形を取った信仰の重視や聖と俗との分離を「宗教」の条件とする西洋近代の宗教概念に由来するものであった。

そしてバトラーと同様に他のヨーロッパ人たちもこの西洋近代の宗教概念に照らし合わせながらダウサやあるいはイスラームそのものの評価を行っていった。ただし共通の宗教概念に立脚しながらも、そこから導き出されたイスラームに対する最終的な評価はむしろ論者によって大きく異なるものとなった。すなわち、バトラーはダウサを排除した上で正しい「宗教」としてのイスラームの姿を想定していたが、逆にダウサのような「非宗教的」実践が混在することを以てイスラームを劣等な「宗教」とする見方もあった。あるいは逆にダウサをイスラームの強い信仰を体現する儀礼とみなす立場や、これとは正反対にこうした儀礼重視の姿勢がイスラームにおける「信仰の欠如」の根拠と見なされる場合もあったのである。

以上のように、当時のヨーロッパ人たちは共通の宗教概念に立脚しながらも、彼らがそこから導き出したタリーカやイスラームの評価は多様なものであった。そしてこうした評価は恐らく取捨選択されながらもその後ムスリムにも内在化され彼ら自身による「正しい」イスラームの定義にも反映されていったと考えられる。ただしこの問題については機会を改めて検証してゆきたい。

7. エジプト・ナショナリズムとコプト 三代川寛子

エジプトのナショナル・アイデンティティには、エジプト、アラブ、イスラームの3つがある。この中でエジプトの宗教的マイノリティであるコプト・キリスト教徒を取り込み、国民として統合することに最も良く成功したのはエ

ジプト・ナショナリズムであった。エジプト・ナショナリズムは、宗教的マイノリティに関して古典的自由主義の立場を取り、宗教的帰属は私的な領域に属するものであり、公の場では宗教的帰属を敢えて無視するべきであるとの立場をとった。また、エジプト・ナショナリズムは、「ナイル川渓谷という祖国への帰属意識を共有するエジプト人」というネイションの形成を目指したが、一方で、「古代エジプト文明の相続人であるエジプト人」というネイションの形成を目指すファラオ主義と呼ばれる潮流も存在した。しかし、一般のムスリムのエジプト人にとって古代エジプトはジャーヒリーヤの時代に過ぎず、1920年代になるまでこの主張が一般の支持を集めることはなかった。

それでは、コプトは歴史・文化的な観点から自らをこのエジプト・ナショナリズムの枠組みの中にどのように位置づけていったのか。コプト語の研究者で本人もコプトであるイクラディユース・ラビーブ(1868-1918年)は、家族や使用人にコプト語を教え、家庭内ではコプト語のみを使い、7人の子どもたち全員にトトやネフェルティティなど古代エジプト風の名前を付けるなど、いわゆる「伝統の創出」を行った。また、コプトの名望家マルクス・シマイカ(1864-1944年)による1910年のコプト博物館の設立は、コプトが自らの歴史や文化、美術などに対する関心・意識・評価を高める効果を持った。このことは、コプトが一般のエジプト人、すなわちムスリムのエジプト人とは異なる歴史・文化を持つ集団であるという自己認識を強める効果を持ち、一部のコプトの間に分離主義的な傾向を生み出したが、それが政治運動に繋がることはなかった。むしろ20世紀前半のエジプトの文脈では、コプトが自らをファラオの子孫と規定しつつも、その血筋および歴史はムスリムのエジプト人と共有されると見なし、これにより「ファラオの子孫であるエジプト民族」としての連帯意識が形成されたと考えられる。

8. ヒドゥマの成立・解消・維持についての考察——ザンギー朝(1127-1234年)の事例を中心に—— 柳谷あゆみ

ヒドゥマ(khidma)は一般には「奉仕」と訳され、主人や師への奉仕から客人への歓待まで極めて広義の奉仕全般を表す。中世イスラーム社会研究では、個人間の人間関係を成立させる重要な要素としてこのヒドゥマが取り上げられてきた。

紐帯原理としてのヒドゥマを政権形成という視点から見た場合、政権所有者へのヒドゥマの状態の有無は、政権の成員か否かという認識に直結するものであった。12世紀後半、セルジューク朝支配崩壊後の政治的秩序再編成の時期においてこのヒドゥマの成立と解消は支配体制の変動を明瞭に表していたものと考えられる。この認識から、この時期、最有力の政権の一つであったザンギー朝の事例からヒドゥマの成立と解消の問題を取り上げ、ヒドゥマによる人間関係の基本性質の解明を試みた。

事例からは、ヒドゥマによる関係がその関係を前提した当事者の「対面」によって成立することが見て取れる。対面とは、目に見えるかたちで両者の関係性を明らかにし、奉仕側には自らの身体をさらす行為であるということができる。ヒドゥマには主人からの恩顧への報いという概念があるが、対面とこの利益が直結することも多い。

また、主人死後、後継者以外への奉仕が容認される事実からは、ヒドゥマによる関係が、基本的には個人間のもので、永続性を想定されていないことが推察できる。これは限られた場所・時間にのみ発効する歓待のヒドゥマの存在によっても裏付けられるだろう。

ヒドゥマの解消は①当事者の死亡、②主人了承による御前からの退去、③奉仕の放棄(反逆)のいずれかで確認されるが、具体的状況の記述は少ない。

主人側は随時ヒドゥマ(御前奉仕)を命じ、対面を再現できる。その連続により関係の継続は確認され、ヒドゥマ自体も定例化・形式化されていくが、相互不信等によって関係が不明瞭な場合は、この命令が対面時の殺害や命令拒否による反逆等のリスクを双方に負わせることになる。そこで実際には主従双方が決定的事態を避け、解消が確認されない限りは継続とする曖昧な規定があったことが事例からは見て取れる。

ヒドゥマによる関係は、規定及び継続性が曖昧であるため、結束力としては強固な裏付けを欠いたといえるが、この曖昧さゆえにその関係性はゆるやかに維持され、政権の一体性を保ちえたことも同時に指摘できる。

9. 18世紀初頭マハッラ・クブラーにおける反ズルム運動の性格について

長谷部史彦

オスマン朝期(1517~1798年)エジプトにおいても、被治者たる民衆(ライーヤ)は経済的な不満や圧政への義

憤などから、多彩な作法をもって集団で抗議し、異議を申し立てた。しかし、こうした民衆運動に関する従来の研究対象は、エジプト州の州都であったカイロに偏している。これに対して本報告では、ガルビーヤ県の県都であり、当該時期のナイル・デルタの中でおそらくは最大規模の都市人口を抱えていたマハッラ・クブラーにおいて 1708 年の末に起きた騒動に照準を定め、重要史料であるシャリーア法廷台帳に依拠しながら、その展開過程、原因と社会的背景、参加者の特徴、争点などを具体的に検討し、運動の性格に関する社会史的考察を試みたい。

法廷台帳の記録から浮かび上がるこの騒動の実像は、いわゆる「民衆運動」の枠内に収まらぬ広がりを示している。それは、地方都市の軍人、ウラマー、シャリーフ、民衆などが結集して押し出した、「地方都市の社会全般による異議申し立て」といった様相を呈しているのである。彼らはこの町の大法廷（バープ・アーリー）に詰め掛け、県総督のズルム（不正）の除去を法官に訴える「法廷闘争」というかたちを選択し、結局、新任県総督の誓約を勝ち取るに至ったが、斯かる行動へと彼らを導いた問題意識についていえば、それは決して一枚岩ではなかった。この騒動には、(1) 歴代県総督による周辺農村の労働力の強奪に対して不満を募らせた、有力ジュールバジー（チョルバジュ、地方騎兵軍リーダー）たちなど軍人ムルタズィム（徴税請負人）による集団的抗議、(2) 県総督側の行動に起因する食糧供給の季節的不全を問題視する都市住民による「食糧騒動」など、複合的な性格がみとめられるのである。このデルタ都市の注目すべき葛藤について、同法廷台帳の他の諸記録なども援用しながら、可能な限り多面的な考察を展開したい。

10. 『トルコ史概要草稿』の分析——トルコ共和国公定歴史学についての一視角——

小笠原弘幸

トルコ共和国は、その建国の初期より現在に至るまでトルコ民族主義を国是とする。そのトルコ共和国の公定歴史観を、歴史叙述の分野において体現する作品が、極端なトルコ民族主義的偏向を持つと評価される『トルコ史概要』（1930年）である。公定歴史観についての研究は長年存在しなかったが、近年 B・エルサンルや E・コポー、わが国では永田雄三による優れた業績が著されており、本格的研究の下地が整いつつあるといえる。しかし、『トルコ史概要』後に刊行された『トルコ史概要草稿』シリーズの存在に着目した研究は、管見の限りでは見あたらない。本報告では、トルコ共和国公定史観の形成に当たって重要な役割を果たしたこのシリーズに着目し、その性格を論ずることとする。

同シリーズは 1932 年から 36 年にかけて、三期にわたって刊行された。その名から想像されるのとは異なり、これは 1930 年刊行の『トルコ史概要』の草稿ではない。『トルコ史概要』の路線を受け継ぎつつも、より包括的な、来たるべき「真の」トルコ史の基盤となるべく準備されたシリーズであり、その意味で「草稿」と名付けられたのである。取り扱われるテーマには、古代トルコ民族史や古代アナトリア史、オスマン帝国史はもちろん、スポーツや芸能などのトルコ文化史も含まれている。執筆者も、のちのトルコ共和国史学界の重鎮となる F・キョプリュリュや I・H・ウズンチャルシュルのほか、医師や絨毯の工場長など、各テーマに応じた様々な人物が寄稿している。内容の傾向としては、『トルコ史概要』に見られる極端なトルコ民族主義的偏向をもった作品が多数含まれる一方、実証的な水準の高い、現在の研究者によっていまだ利用され続けている作品も少なくないという点が指摘できる。また、『トルコ史概要』とトルコ共和国公定歴史観においては、トルコ共和国によって乗り越えられた存在であるオスマン帝国史が等閑視されているという指摘があるが、本シリーズにおけるオスマン帝国関係の諸作品は質量共にもっとも重要なグループを形成している。このことは、この時期におけるオスマン帝国観が単純なものでは無かったことを示しているといえよう。

この『トルコ史概要草稿』シリーズに基づいた、より包括的なトルコ史編纂の企画は最終的に放棄されることとなったが、本シリーズがトルコ共和国におけるナショナル・ヒストリー形成において果たした役割は大きい。

11. ゼキ・ヴェリディ・トガンのトルキスタン観——1930年前後の活動と議論を中心に——

小野 亮介

ゼキ・ヴェリディ・トガン（1890-1970）はその前半生をロシア革命後の民族運動に捧げたことで知られるが、優れた研究者・熱烈なトルコ民族主義者としての後半生との関連性はこれまで十分に検討されてこなかった。本発表ではその過渡期に相当する 1930 年前後（1927-31）における活動と議論を亡命者という観点から考察した。

トルキスタン（現在の中央アジア）での反ソ運動バスマチに失敗しヨーロッパ、トルコに逃れたトガンは、他の亡命者らと共に亡命組織「トルキスタン民族同盟（TMB）」を再編し、中央委員長として指導した。ポーランドで結成された反ソ同盟「プロメテ」の支援を受け、1927年6月にTMBは機関誌『イエニ・トルキスタン』の発行を果たす。同誌においてトガンは精力的に論文を発表しているが、そこからは飲酒に寛容な態度、ボルガ河流域との活発な交流、共通語としてのトルコ文章語などをトルキスタンの文化的特徴として捉えていたことが伺える。特にシャイバーン朝始祖たるシャイバク・ハンはそのシンボルであった。

一方、トガンは在欧亡命コミュニティの有力者ムスタファ・チョカエフとの対立のため、1929年5月にはTMBからの離脱を余儀なくされた。これと前後して彼はプロメテ関係者へ頻りに書簡を認め、分離主義者としてチョカエフを批判している。その中でトガンは、TMBは諸部族の連合体であらねばならず、自身の属するバシキール人はその本質的な構成要素であるとする見解を示した。

事実上TMBを追放されたトガンは以後独自の活動を展開し、特にハンガリーとの関係を深めてゆく。1929年夏のハンガリー旅行において政治家や軍部と接触し一定の成果を挙げ、講演会も行った。また1931年のハンガリー語論文では技術の招来、新文化の創出などのメリットを挙げてハンガリー人のトルキスタン移住を歓迎した。にもかかわらず人種的・言語的相違の維持を念頭に置いている点は興味深い。

以上、対象の異なる著作を照らし合わせると、彼のトルキスタン観が広範な文化的一体性に基づくものであると同時に、エスニック面での内的多様性をも前提とする緩やかなものであったことがわかる。その反面で特定の民族・言語の突出や排除に対してトガンは強く反発していた。従ってトガンのトルキスタン観がバシキール人をも内包し得るものであり、かつチョカエフ批判と結びついている点で、彼による地域概念がTMB内部の主導権争いと密接に関係していたことを結論として指摘した。

ポスターセッション

1. 早稲田大学エジプト学研究所の調査 (I) アブ・シール南遺跡、(II) ダハシュール北遺跡、(III) ルクソール西岸岩窟墓調査 近藤 二郎

早稲田大学のエジプトの調査は、1966～67年のナイル川流域のジェネラル・サーヴェイに始まる。その後、1971年12月～72年1月に上エジプトのルクソール西岸のマルカタ南遺跡の発掘調査が開始され今日に至っている。現在、早稲田大学エジプト学研究所が中心となって、エジプトで発掘・調査している3つの遺跡に関して、最新の成果をポスターで発表するものである。

(I) アブ・シール南遺跡

1991年12月に第1次調査を開始して以来、継続的に発掘・調査を実施している。これまでの発掘によって、アブ・シール南丘陵の全容がほぼ明らかになっている。2008年8月の第17次調査で、丘陵頂部において新たに第19王朝のトゥーム・チャペルを発見し、2009年2月の第18次調査では、このトゥーム・チャペル下部に位置する埋葬室を検出し、そこからカエムワセトの娘と推定できるイシスネフェレットの石灰岩製石棺が発見した。保護・修復作業などを含め最新の調査成果を報告したい。

(II) ダハシュール北遺跡

1996年、人工衛星の画像解析により調査が開始されたダハシュール北遺跡は、2009年6～7月に第17次調査までが実施されている。この遺跡からは、中王国～新王国時代にわたる広大な墓域が検出されている。2005年1月の中王国時代のセヌウの埋葬の発見以降、中王国、新王国時代の未盗掘の埋葬を幾つか発見している。発見された木棺の保存・修復作業など最新の調査状況について報告する。

(III) ルクソール西岸岩窟墓調査

2007年12月に開始されたルクソール西岸アル=コーカ地区における岩窟墓群の発掘調査で、第1次調査が2007年12月～2008年1月に、第2次調査が2008年12月～2009年1月に実施された。テーベ西岸岩窟墓の第47号墓(ウセルハト墓、TT.47)の上部に厚く堆積した砂礫の除去作業と北側に位置する第174号墓(TT.174)、キャンプ番号第62号墓(TT.-62-)、第264号墓(TT.264)、キャンプ番号第330号墓(TT.-330-)の各岩窟墓において、測量実測作業、壁面ト

レース、岩窟墓内部の清掃作業なども併行して実施した。また、第-62-号墓(TT-62-)と第 264 号墓(TT.264)では、入口開口部に新たに鉄扉を設置し保護するようにした。第 47 号墓の発掘では、発掘区を南に拡張し、墓の正確なプランの把握につとめ、第 2 次調査では、レリーフ装飾のある墓の入口上部を再発見することができた。発掘調査の状況と今後の方針についても発表したい。

2. オスマン朝時代のアラビア語写本——トルコ・イスラム美術博物館 2155-2162 写本をめぐって——

中町 信孝

本発表の目的は、マムルーク朝後期の歴史家アイニー al-`Aynī (d. 1451) のアラビア語年代記『イクド・アルジュマーン *Iqd al-Jumān*』の内容を含む当該写本群の史料的重要性を検証し、また当該写本の来歴を探ることから、オスマン朝時代におけるアラビア語史書受容の一側面を明らかにすることにある。

当該写本が収められているトルコ・イスラム美術博物館 (TIEM と略記) は、元の名をイスラム・ワクフ博物館と言い、スレイマニエ・モスク複合施設に寄進されたワクフ物件中の文物がそのコレクションの母体となっている。ただし当該写本は、エディルネのセリミエ・モスクより招来された 114 点の写本のうちの一部である。

Cahen、Sesen らの研究、および発表者がすでに行った調査から、当該写本 8 冊を書写者ごとに区分すると、(a) al-`Irāqī 書写本、(b) al-Ikhlāmī 書写本、(c) 書写者不明本、(d) al-Azharī 書写本の、4 つのグループに分けられる。これらはいずれも、著者没後まもなくのマムルーク朝末期にカイロで作成されたと判断しうる。

写本奥付と Babinger の研究等が明らかにするところでは、当該写本が現在まで保存されてきたことには、18 世紀のオスマン朝アフメト 3 世期における『イクド』の翻訳事業が大きく関係している。つまり、1725 年にアラビア語からトルコ語への翻訳が命じられた時、当該写本を含む 30 数巻の『イクド』写本が、1727 年にセリミエ・モスクからイスタンブルに取り寄せられたというのである。そして翻訳完成後、当該 8 写本を除いてすべて散逸してしまったという。

当該写本は、『イクド』の未校訂部分に相当する、古い段階で書写された写本を含んでいるため、その史料価値はきわめて高い。また、奥付に言う 30 数巻からなるシリーズがセリミエ・モスクに実際にあったとするならば、それは 16 世紀の段階ですでに完本に近い形で『イクド』が揃っていたことを示している。今後さらなる文献調査を行うことによって、18 世紀の『イクド』翻訳事業の全体像を明らかにするとともに、『イクド』写本の伝承経路をより詳細に再構成することができるであろう。

3. ユーフラテス川中流域の先史遺跡——第二次、第三次踏査報告——

西秋 良宏・門脇 誠二・久米 正吾・安倍 雅史

2008 年より、シリア北部、ユーフラテス河中流域において前 3 千年紀青銅器時代に焦点をあてた遺跡分布調査を継続している。目的は、当地に青銅器時代集落が営まれるにいたった歴史的経緯を明らかにすること、青銅器時代の土地利用にかかわる知見を得ること、そして、該期の農耕民・遊牧民間の社会関係をさぐること、の三点である。

調査地は既知の青銅器時代遺跡であるガーネム・アル・アリの周囲、半径 10km 圏である。この遺跡は河川低地に位置するテル型定住集落であるが、住人たちが放牧等のため南の乾燥ステップ台地も利用していたことは確実である。同時に、ステップに展開していた遊牧民集団と何らかの社会関係を発達させていたことも推測される。

2008 年 3~4 月におこなった第一次調査の成果は昨年度の本大会で報告した。ここでは、第二次 (2009 年 2~3 月)、第三次 (同 5 月) の成果について述べる。同定した遺跡の総数は 100 を超えている。その分析により明らかになった主な所見を報告する。

(1) 遺跡の年代分布

中・後期アシュリアンおよび銅石器時代の遺跡を発見し、前期旧石器時代から青銅器時代にいたるシークエンスをほぼ同定し得た。後期旧石器時代初頭や新石器時代初頭 (PPNA) が欠けていること、銅石器時代遺跡が青銅器時代遺跡と比べて極端に少ないことなどは注目に値する。特に後者は、青銅器時代集落が在地社会の漸進的発展の結果、発生したものではないことを示唆する。

(2) 青銅器時代の集落パターン

第一次踏査によって、青銅器時代遺跡に拠点集落、墓地、短期逗留地の三種の型があることが認められた。また、拠点集落（ガーネム・アル・アリ、ハマディーン、ジャズラ）は、いずれも直近に墓地群や短期逗留地（放牧地点？）を有しており、そのセットが大きなワディをはさんで数キロ間隔でならぶことも明らかになっていた。今回、ジャズラ東方の河川低地において新たな拠点遺跡（ムグラ・ザギール）、墓地、短期逗留地のセットを発見し、このパターンを補強することができた。これらは定住農耕集落ごとの活動領域を示していると考えられる。

(3) 青銅器時代の集団関係

ステップ台地の突端に位置するワディ流域（ベイルーン）において大規模なケルン墓群を発見した。ケルン墓は台地奥の遊牧民に固有な墓形態である。すなわち、河川低地の農耕民の活動領域内に遊牧民が墓地をかまえていたことが示唆された。これは、両者の社会関係を分析するための貴重な手がかりとなる。

4. 青銅器時代ユーフラテス河中流域の拠点集落——テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査 2009——

長谷川教章・常木 晃

シリア・アラブ共和国の北東部、ユーフラテス河中流域の南側に位置するビシュリ山系をフィールドに、「セム系部族社会」が形成された経緯を明らかにする総合的研究プロジェクトが 2005 年度より発足した（文部科学省科学研究費補助金 平成 17 年度発足特定研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」領域代表者：国土館大学教授 大沼克彦）。本プロジェクトでは、現地調査の一環としてユーフラテス河流域に位置するテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘をおこなっている。本発表は、当該遺跡の第 3 次及び第 4 次発掘調査を中心とした調査概報である。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ラッカ市から東に約 50km、ユーフラテス河右岸の微高地上に立地した単独のテルである。テルの面積は約 12ha であり、テル・ビーア遺跡の様な大規模都市遺跡に比して中規模な拠点集落である。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡はこれまでの調査において、紀元前 3 千年紀中葉から後葉にかけての居住址が確認されている。

第 4 次調査では、遺跡北側斜面に設置されたステップ状の第二発掘区において、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の利用が開始された時期を確認するため、地山まで掘削を行った。当該遺跡の最下層の居住遺構は、より上層の遺構とのいくつかの相違点を確認された。特に顕著な点は、遺構の構築材である。上層の遺構が石膏岩を主要な建築材として構築されていたのに対し、最下層では、長方形の日干レンガのみが使用されている。

また、最下層出土土器は、胴部に竹管文や爪形文が施されている点が特徴的である。より上層から出土している Simple Plain Ware は、ユーフラテス河中流域に分布する前期青銅器時代に特徴的な土器である。しかし、彩文や刻線などによる装飾は極めて少ない。最下層出土土器の位置づけは、当該遺跡の下限年代を決定する上で重要となってくる。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡南方の台地縁辺部には、アブ・ハマド遺跡など前期青銅器時代の墓地遺跡が数多く確認されている。注目したい点は、類例の少ない極めて特徴的な土偶がアブ・ハマド遺跡とテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の両方で確認されていることである。これは台地縁辺部に築かれた埋葬施設群の被葬者の性格を考察する上で重要な手がかりである。

また、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ユーフラテス河中流域の多くの遺跡と同じように紀元前 3 千年紀末に、大規模な居住群の痕跡は姿を消す。しかし、その後も小規模な土壙墓が築かれていたことが確認された。集落遺跡と墓域の立地パターンの変化を考える上でも興味深い事例である。

現在各層位の放射性炭素年代測定の分析も進んでおり、徐々にテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の全容が明らかに

なりつつある。今後の調査・研究の進展が期待される。

5. エジプト・アコリス遺跡調査 2009

花坂 哲

2002年に調査を開始した「南区」は河岸段丘の途切れた岩山の南側斜面とその裾野にあたり、第3中間期から末期王朝時代を中心とした日乾レンガ製の遺構を数多く検出している。南区の特徴は手工業に関する工房址や関連遺物が数多い点にあり、遺構では、皮から革を作り出す鞣製・製革を行い、サンダルやブーツなどを製作した皮革工房址や、野鍛冶的に青銅製品の修繕を行っていたと思われる遺構が挙げられる。また遺物では、製作途中のガラス製ビーズやガラス棒、花形ビーズ用の土製鋳型、未焼成の土器の塊、紡錘車などが出土しており、南区はさまざまな製品の工房域であったと思われる。

当時の居住域の中心は岩山の北側に広がっていたと思われるが、南区にも住居址や倉庫址などが点在している。裾野部では交差する道路の周囲で、広さ25~150㎡の第3中間期に属する5軒の住居址（House I~V）を検出している。各住居は比較的大きな部屋の周りに3~4室の小さな部屋を配する構造となっているが、各部屋の用途については結論を得ていない。House IとIVでは、壁沿いにベンチ状の張り出し（マスタバ）を持つ部屋が見つかったが、ベッドとして使用するには幅が狭いため、着座用であったと思われる。住居の奥まった個所に位置し、壁の一部に黄色顔料が薄く残っていることから、儀礼・祭式などを行っていた部屋の可能性がある。また、House IIの一室では花文様などが描かれた彩色壁画片が見つかった。一般住居の壁が彩られることは珍しく、住宅サイズや立地を考えると、House IIは公共の施設であったと考えられる。

また、出土する遺物はビーズや護符などの装飾品類も数多く出土するが、農具や紡錘車などの木製品、釣針やピンなどの青銅製品、石器や擦り石などの石製品、植物や獣糸製の編み籠や敷物、皮革製のロープなど日常生活で使われるものが多い。また、在地産の土器に混じって、東地中海方面からもたらされたアンフォラ容器や提瓶などの土器も出土している。

特殊な成り立ちの都市を除くと、エジプトにおける都市・集落址の発掘調査例は少なく、研究は進んでいない。国家の衰退期とされる第3中間期から末期王朝における一般民衆の生活や社会を知るうえでも、今後も慎重に調査を続けていく必要があるだろう。

6. 北西シリア、テル・エル・ケルクの新石器時代の墓地

村上 尚子・常木 晃

テル・エル・ケルク遺跡は、シリア・アラブ共和国イドリブ県のエル・ルージュ盆地に位置する。1997年から現在まで、シリア考古博物館総局と筑波大学シリア考古学調査団が合同で発掘調査を行なっている。テル・エル・ケルク遺跡の最も北に位置するテル・アイン・エル・ケルク遺跡の中央発掘区から、2007年に多数の人々が集約的、継続的に埋葬されたと考えられる屋外型の墓地が発見された。

2008年までに発見された人骨は、エル・ルージュ2c期（土器新石器時代中葉、およそ紀元前6600~6300年）に属する文化層から出土し、現在112体が確認されている。それらの人骨は胎児から男女を含む成人まで幅広い年齢層が確認されており、一次埋葬のほか、二次埋葬や火葬といった多様な埋葬方法がみられる。一次埋葬の遺体の体位はすべて側臥や伏臥、仰臥の屈葬であり、極度に膝を曲げられた人骨も少なくない。二次埋葬としては、ある程度白骨化が進んだ遺体の一部、特に頭蓋骨と長骨を中心に集めて、複数体を一緒に再埋葬する集骨葬がみられる。これは西アジア地域の新石器時代の埋葬方法として一般的に広く行われていた。この墓地からは、一つのピット内に複数体の焼人骨を含む5~10体前後の人骨が密に重なりあって出土している例がみられる。火葬の例としては、ピット内で焼かれ、そのまま埋められたと考えられる例や、おそらく火葬後に動かされたと思われる複数体の焼人骨の破片が一ヶ所から発見された例もみられる。

西アジアで発見されている新石器時代の埋葬人骨のほとんどは、集落の居住域に営まれた遺構の内外から概して単発的・拡散的に発見されている。また、先土器新石器時代には一次埋葬と同様に二次埋葬が盛んに行われるが、土器新石器時代に入ると二次埋葬の割合は減少する。また、新石器時代を通して焼人骨が発見される例はわずかにあるが、明確な火葬の痕跡を持つ例はテル・アイン・エル・ケルク遺跡の墓地の例が最古となる。この墓地から発見された埋

葬人骨に、明確な二次埋葬と火葬が共に認められることは、この時期の北シリア地域において、居住域での二次埋葬から屋外型の一次埋葬の墓地へという埋葬の変遷の過渡期にあったことを窺わせるものである。